

本日、参加いただきありがとうございます

- 簡単な紹介をお願いします。
- 自己紹介 場所など
- 参加の興味・関心などの根拠などお聞かせください。

今日のテーマ

「病の画家ヴァルド・ムンクの生涯と作品を探る」

病の画家・ムンクの生涯

①

「病と死の家」
に生まれて
0歳~20歳
1863~1883

- ・ムンク一族は著名な聖書者
- ・父は神経症
- ・真夜中に目を覚まし恐怖に怯える。
- ・兄弟ともに虚弱体質で生まれる。
- ・結核・気管支炎・リューマチ・精神病。
- ・18歳に王立美術学校に入学。

②

クリスチャニア
からパリへ
21歳~28歳
1884~1891

- ・21歳前衛芸術家のグループに参加
- ・22歳でパリへ滞在マネや印象派の芸術に惹かれる
- ・26歳政府の奨学金でボナのアトリエに通う父の死去
- ・27歳パリでリューマチ熱にかかる
- ・28歳パリにアトリエを借りる

③

「不安の時代」
の画家
29歳~44歳
1892~1907

- ・29歳ベルリン芸術家協会で展覧会参加
- ・30歳ベルリンでアトリエを借り制作に取り掛かる
- ・31歳エッチングとリトグラフに取り掛かる
- ・32歳弟アンドレス死去
- ・33歳パリに移る。・36歳ノルウェーのサナトリウムで療養する
- ・39歳愛人トゥラとの議論中、左手中指の一部を失う

④

死から生へ
至る画家
45~80歳
1908~1944

- ・45歳コペンハーゲンで精神を病み治療
- ・48歳大学講堂壁画コンペで優勝
- ・60歳ドイツアカデミーの会員となる
- ・74歳ドイツ美術館にあった82作品が退廃芸術として没収される。ノルウェーで競売にかけられる
- ・77歳ノルウェーがドイツ軍に占領される
- ・80歳1944年永眠する。

①-1(1863・0歳~1883年・20歳)

「病と死の家」に生まれて

Edvard Munch

1863 (0歳)

12月12日、ノルウエーのヘドマルク郡
レーテン村のエンゲルハウゲン農場
で、軍医クリスチャン・ムンクとそ
の妻ラウラ・カトリーネの長男とし
て生まれる。

1864 (1歳)

一家でクリスチャニア(現・オスロ)
に移る。

1868 (5歳)

12月、母が三女インゲルを産んだ
後、間もなく結核で死去(享年30)。
母の妹カレン・ビョルンスタッドが子
どもの養育にあたる。

1877 (14歳)

姉ソフィーエが結核で死去(享年15)。

1879 (16歳)

工業専門学校に入学。技師となる
ための勉強を始める。

1880 (17歳)

画家になる決意をし、工業専門学
校を退学。

1881 (18歳)

王立美術工芸学校に入学。

1882 (19歳)

仲間と共同でアトリエを借りる。ク
リスチャン・クローグの指導を受ける。

1883 (20歳)

フリッツ・タウロウの野外アカデミー
に参加。クリスチャニアの「秋季展」
に初出品。

○いざ画家の道へ19歳の自我と自負《自
画像》>1881-82・・・ムンクが王立美術
工芸学校に通っていた19歳の頃に描かれ
た最初の自画像。画家になることを決心
してから、まだ1、2年しか経っていない
時期の作品と推定される。暗い背景から
浮かび上がる青年ムンクの顔には、気負
いとも自信とも取れるような若者らしい
挑戦的な表情とともに、神経質そうな視
線には、繊細な一面が垣間見える。



母ラウラと子どもたち(1868年)。母親
の左手側にいるのが4、5歳のエドヴァルド。
その前にラウラ、膝上にインゲル、右手側に
ソフィーエとアンドレアス。

自画像1881-82年(18-19歳)

①-1(1863・0歳~1883年・20歳)

「ノルウェー・オスロ」に生まれ

A レーテン
1863年12月12日、この村のエンゲルハウゲン農園で生まれる。

B オースゴールストラン
1890年以降、度々夏を過ごした地。1897年に小さな家を購入。

C クラゲリョー
1909年、スクルッベン邸を賃借して暮らす。

D ネードレ・スロット通り9番地 (1864~1868年)

E ピーレ通り30番地 (1868~1875年)

F トルヴァル・メイエル通り48番地 (1875~1877年)

G フォス通り7番地 (1877~1882年)
フォス通り9番地 (1883~1885年)

H オーラフ・リーエス広場4番地 (1882~1883年)

I スカウ広場1番地 (1885~1889年)

J エケリー
1916年に購入した終の住処。
1929年には冬用のアトリエを建設し、
1944年に亡くなるまでここで暮らした。

NORWAY
ノルウェー

スウェーデン

フィンランド

バルト海

デンマーク

オスロ

オーラフ・リーエス広場

スカルストラン

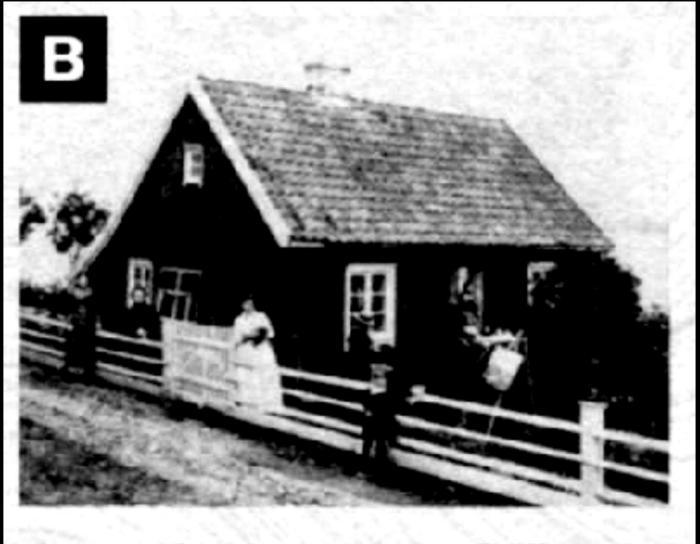
クラゲリョー

レーテン

ムンクのノルウェー



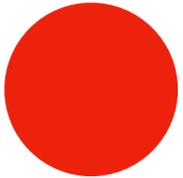
A
ムンクの生家 (レーテンのエンゲルハウゲン農園)。



B
オースゴールストランで制作をするムンク(1889年)。門の脇にはインゲル、窓辺にラウラがいる。

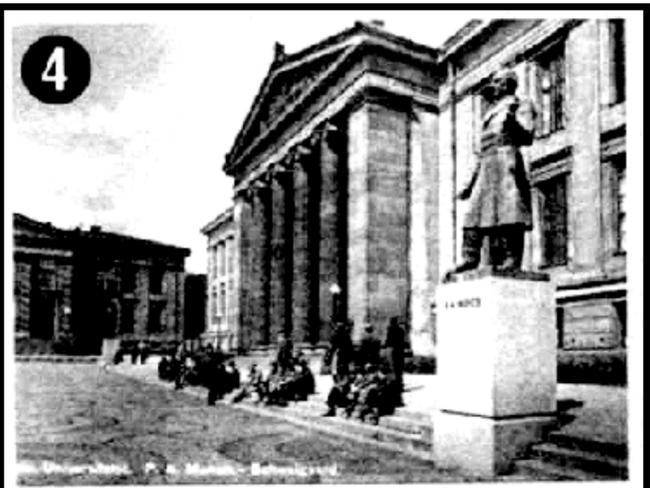


C
クラゲリョーのスクルッベン邸の野外アトリエにて。



①-1(1863・0歳~1883年・20歳)

「ノルウェー・オスロ」に生まれ



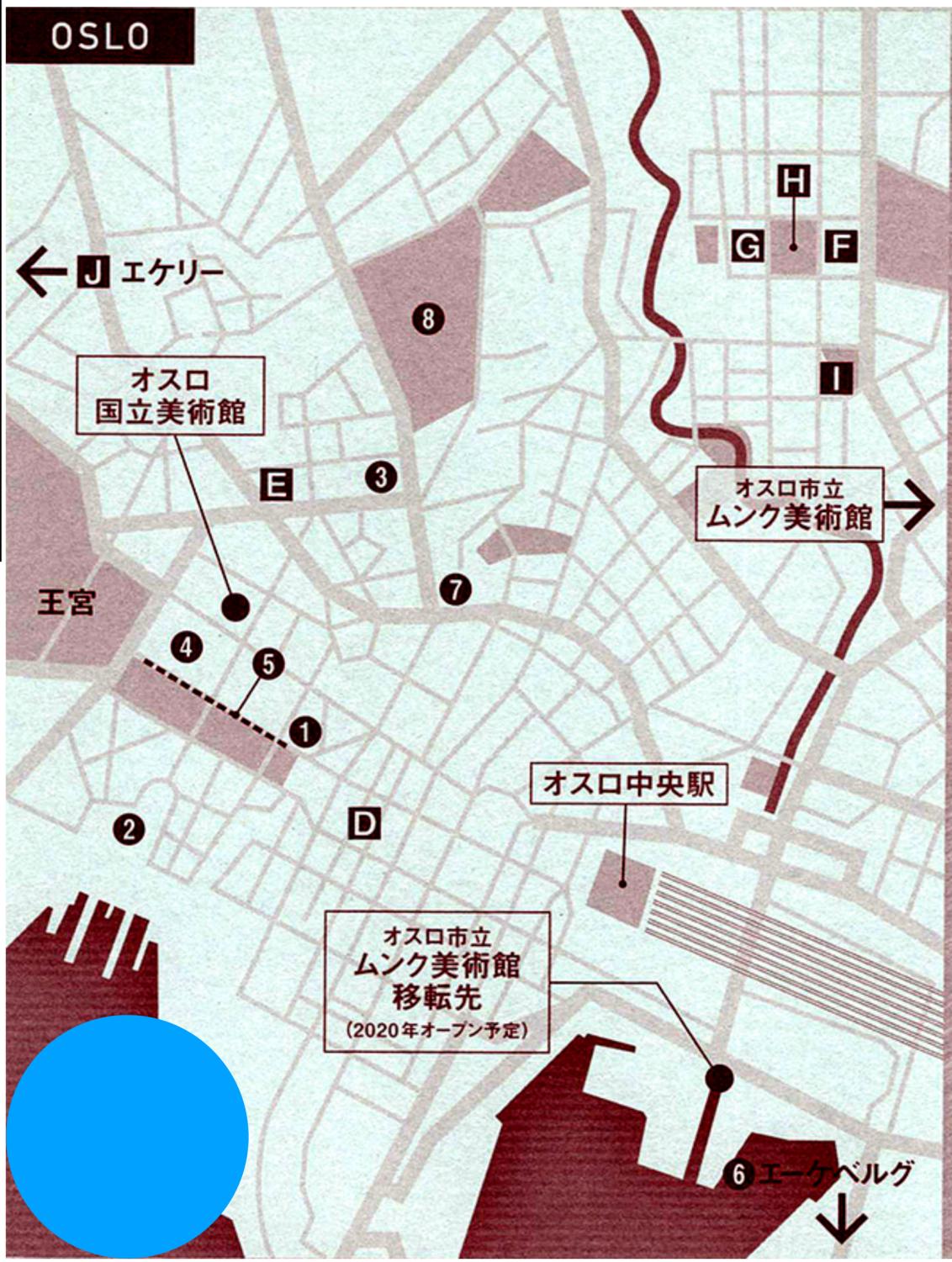
4
オスロ大学講堂のファサード
(1935年頃)。ムンクの伯父アン
ドレアス・ムンクの銅像が建つ。



J
エケリーのムンクの住居兼
アトリエ(1930年代)。



5
カール・ヨハン通り
(1863~1875年頃)。



- ① **グラン・カフェ**
クリスチャニア・ボエーム
のたまり場。
- ② **オスロ市庁舎**
1927年以降、市庁舎の装飾
壁画の制作を試みたが実現せず。
- ③ **王立美術工芸学校**
1881年に入学。
- ④ **オスロ大学**
1911年~1916年に
講堂壁画を制作。
- ⑤ **カール・ヨハン通り**
《カール・ヨハン通りの夕暮れ》を
はじめとした作品に描かれる。
- ⑥ **エーケベルグ**
《叫び》の源となった
体験をした場所。
- ⑦ **キリスト教会**
母ラウラ、弟アンドレアス、
姉ソフィーエの墓がある。
- ⑧ **救世主教会**
ムンクの墓がある。

①-2(1863・0歳~1883年・20歳)

「病と死の家」に生まれて



パラフィン・ランプの周りで1883年20歳

○ ゴッホの初期作品を彷彿させる一枚《パラフィン・ランプの周りで》1883・・・ランプの灯りがテーブルの周りに座る人々の顔を照らし出す。表情はほとんど描かれておらず人物の特定は難しいが、右側の人物は父親であろう。明暗の調子や粗い筆遣い、家族という主題などは、ファン・ゴッホの《馬鈴薯を食べる人々》を想起させるが、この時点でムンクはまだ無名だったゴッホの作品を知る由もなかった。



長椅子のクリスチャン・ムンク
博士1981年18歳

○ 書物を愛した父の日常を描く《長椅子のクリスチャン・ムンク博士》1881・・・ムンクによれば、父親のクリスチャンは医師としての腕はたいしたことがなく、外科医よりは詩人の方が似合いだったという。長椅子で読書する父親の姿には、そんなムンクの父親観が反映されている。子どもが小さい時には読み聞かせをすることもあったが、それはポーやドストエフスキーなどの重苦しい小説だったらしい。

②-1(1884・21歳~1891年・28歳)

クリスチャニアからパリへ

Edvard Munch

1884 (21歳)

前衛芸術家のグループ「クリスチャニア・ボエーム」に参加。

1885 (22歳)

フリッツ・タウロウの奨学金を得て、パリに3週間滞在。マネや印象派の芸術に惹かれる。この年、「ミリー・タウロウと出会う」。

1889 (26歳)

クリスチャニアで初個展。政府の奨学金を得て、10月、パリへ留学。ボナのアトリエに通う。11月、父死去。「サン・クルー宣言」を書く。

1890 (27歳)

クリスチャニアに戻り、夏はオーストランドで過ごす。政府奨学金を得て、渡仏。パリに向かう途中、ル・アーヴルでリユーマチ熱に罹患する。12月、《その翌日》含め5作品が火事で焼失。

1891 (28歳)

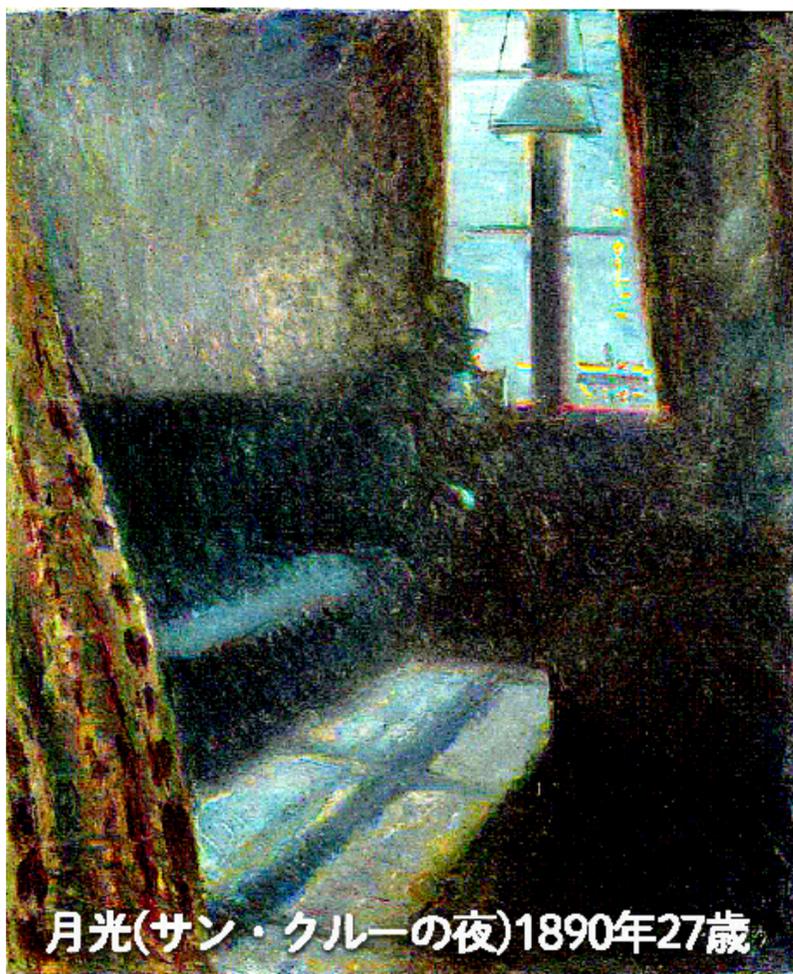
パリとニースへ旅行。4月、パリにアトリエを借りる。夏をオーストランドで過ごす。3度目の政府奨学金を得て、コペンハーゲン経由でパリへ。オスロ国立美術館がムンクの作品を買い上げ。



ボナのアトリエ1890年27歳

○ **ムンク父の死を悼み、描いたパリの一夜の情景《月光（サン・勿レーの夜）》** » 1890・・・留学した年の暮れ、パリでコレラが発生したため、ムンクは近郊のサン・クルーに移る。住んだのはカフェの上階の部屋で、窓からはセーヌ川を見下すことができた。本作でムンクは、その室内の様子と、窓から見えるセーヌ川の夜景を、窓辺で物思いにふける人物のメランコリックな心情を反映するような調子で描き出している。

○ ムンクはその後、**1889年（この年に父を亡くした）**、パリ万博の年に政府の奨学金を得て初めてパリを訪れ、かつてロートレックも学んだボナの教室に短期間学んだ後、パリ近郊のサン・クルーに移り住み、ここでいわゆる「**サン・クルー宣言**」を書いた。それによると、「我々はもはや本を読む人や編み物をする女のいる室内を描いてはならないのだ。我々は呼吸し、感じ、苦しみ、愛する真の人間を描かなければならない」。ムンクはここでそれまでの印象派寄りの路線を否定し、独自の立ち位置を明らかにしている。



月光(サン・クルーの夜)1890年27歳

②-2(1884・21歳~1891年・28歳)

クリスチャニア・ボエーム



<ハンス・イエーゲル>1889年・26歳

○ 《ハンス・イエーゲル》1889年・・・1885年に発表した『クリスチャニア・ボエームから』でイエーゲルは、古いキリスト教的道徳やブルジョワの小市民性などを徹底的に批判したが、ポルノ作品と判断され、発禁処分となって収監された。ソファにゆったりと座るこの肖像からは、自信に裏打ちされたゆとりある態度と、権力に屈しない意志の強さを感じ取ることができる。

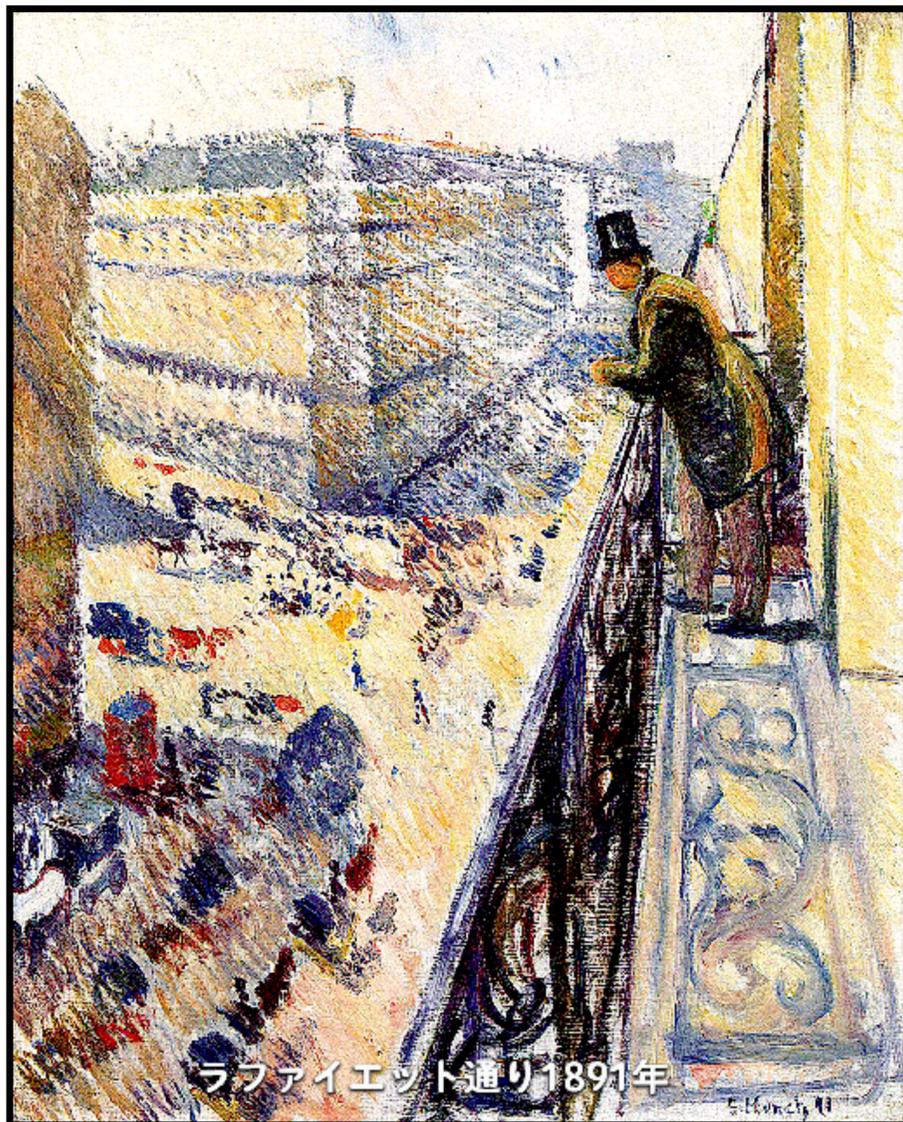


<朝>1884年・21歳

○ 「光」を主題とした初期作品《朝》1884年・・・ベッドに腰掛ける女性は、片方が裸足で、手に靴下を持ち、朝の身繕いをしているところだ。ムンク自身が、この絵の主題は「光」とであると語っているとおり、画面全体が朝の明るい光に満たされているが、ムンクがまだパリに行く前の作品であり、印象派の影響というよりは、スケーエン派の外光表現の影響が強く感じられる。

②-3(1884・21歳~1891年・28歳)

印象派との出会い



○粗いタッチと俯瞰の構図印象派の影響が表れた一枚《ラファイエット通り》

1891・・・画面右側にあるバルコニーから大通りを見下ろす構図は、モネが第一回印象派展に出品した《カビュシーヌ大通り》(1874年)や、同じ印象派のカイユボットが描いた《オスマン通りのバルコニー》(1880年)などと共通している。構図だけでなく、粗い絵筆のタッチや明るい色彩など、印象派の影響が明らかに見てとれる一枚である。



○印象派に次いで試みた新印象派風《カール・ヨハン通りの春の日》1891年・・・新印象派の点描技法の影響を受けて制作されたと考えられる作品である。ただ、点描は画面前景の地面や、中央後ろ向きに立つパラソルを差した女性などに部分的に応用されているに過ぎず、その緻密さや色彩分割に関しては、新印象派ほど厳格には行われていない。点で描くということに興味を持って試みた実験的な作品であろう。

○《カール・ヨハン通りの春の日》、《ラファイエット通り》のような明らかに印象派風の作品を残している。これらの作品には印象派のみならず、スーラ、シニヤツクの新印象派(点描派)の影響もうかがえる。しかし印象派的な様式、主題では自己の内面を語りえないと知ったムンクは1889年の《春》で印象派離れを宣言するのである。

②-4(1884・21歳~1891年・28歳)

印象派の訣別と病める子



病める子1885-86(22~23歳)



春1889年26歳

○エドヴァルド・ムンク《病める子》1885-86年・・・「この絵で私は新境地を開拓した。それは私の芸術の突破口であった。私のその後の大半の作品はその存在をこの絵に負っているのである」ムンクはこの後、20世紀に入ってから油彩で、版画でこの絵のレプリカ（自作の再制作）やヴァリエーション（異作）を制作し、油彩だけでも少なくとも6点が知られている。これは10年近く前の話であり、彼女の死の状況を再現したものではない。病める子のモデルとなったのは画家の父の患者のひとりで、当時11歳、母親のモデルは叔母のカレン・ビョルスタッドが務めた。

○印象派との訣別宣言《春

》1889・・・病気の少女と母親という《病める子》と同じモチーフが扱われているが、より写実的で窓辺の描写には印象派の影響も感じられる。ムンクは「<春>で印象主義とリアリズムに別れを告げた」と言っているので、この絵が印象主義とリアリズムの最後の作品だと考えていたのだろう。この後ムンクはより象徴主義的な性格を強めていくことになる。

②-5(1884・21歳~1897年・34歳)

家族の肖像(亡き母と娘インゲル)



海辺のインゲル1889年・26歳



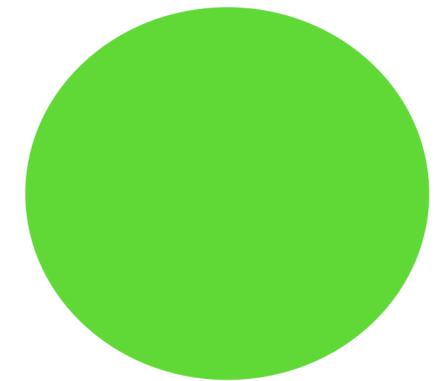
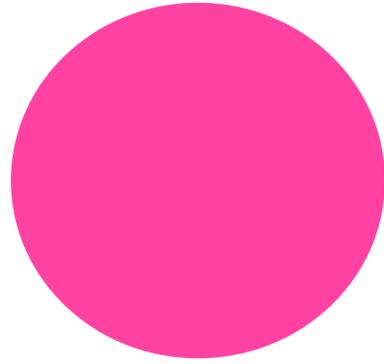
母と娘1897-99年(34-36歳)

○ 家族の肖像《海辺のインゲル》1889年・・・母親がなくなる直前に生まれた末妹のインゲルは、ムンクのお気に入りのモデルで、何点もの作品に描かれている。穏やかな波打ち際の岩の上に腰かけたインゲルは、硬直したように身をこわばらせ、表情も硬い。単純化された形態や画面全体をおおう柔らかい均質な光には、同時代フランスの画家リュヴィス・ド・シャヴァンヌの影響も指摘される。

○ 《母と娘》1897-99年・・・母と娘は、座った姿と立ち姿、横向きと正面向き、黒っぽい服と白い服、そして老人と若者と、多くの点で対照的に描き分けられている。ふたりの間には会話もなく、視線の行方も異なっていて、それぞれ孤立しているように見えるが、その間を取り持つかのように山の端から顔を出している満月が、ひとときわ明るい光を放っている。

③-1(1892・29歳~1907年・44歳)

不安の時代の画家

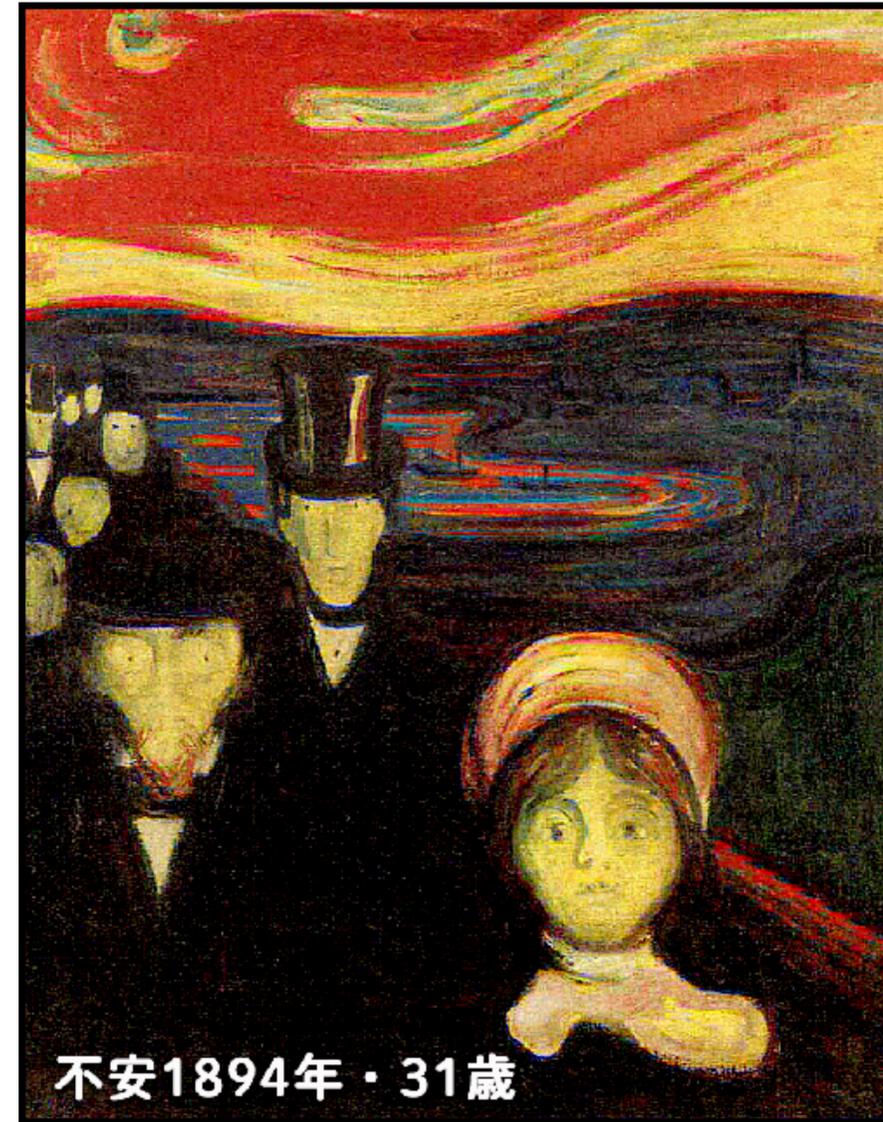


Edward Munch 1892 (29歳)	11月、ベルリン芸術家協会で展覧会。黄否両論を呼び、1週間後に展覧会は閉鎖される。ストリンドベリと出会う。
1893 (30歳)	ベルリンでアトリエを借り、「生命のフリーズ」の制作に取り掛かる。
1894 (31歳)	最初のエッチングとリトグラフを試みる。妹ラウラ入院、精神分裂病と診断される。
1895 (32歳)	弟アンドレアス死去。
1896 (33歳)	パリに移る。木版画とカラー・リトグラフをオーギュスト・クロエフで制作。アンデパンダン展とビュンク画廊に出品。ボードレール「悪の華」の挿絵を制作(後に出版中止)。
1898 (35歳)	トゥラ・ラルセンと出会う。
1899 (36歳)	ノルウエーのサナトリウムで療養。
1902 (39歳)	ベルリン分離派展に「生命のフリーズ」を出品。愛人トゥラとの議論中、銃弾で左手中指の一部を失う。
1907 (44歳)	ラインハルト劇場の内装、完成。



絶望1992年・29歳

○夕焼けに染まる空《叫び》の一步手前《絶望》
 ≫1892・・・本作は、同じ《絶望》というタイトルを持つ《叫び》の前段階を示している。本作の初期のバージョンをムンクは「《叫び》の第一作目」と称していた。いずれも左奥へ急激に収致する橋と、夕焼けに赤く染まる空という、《叫び》と共通する構図を持つが、人物だけが入れ替えられている。

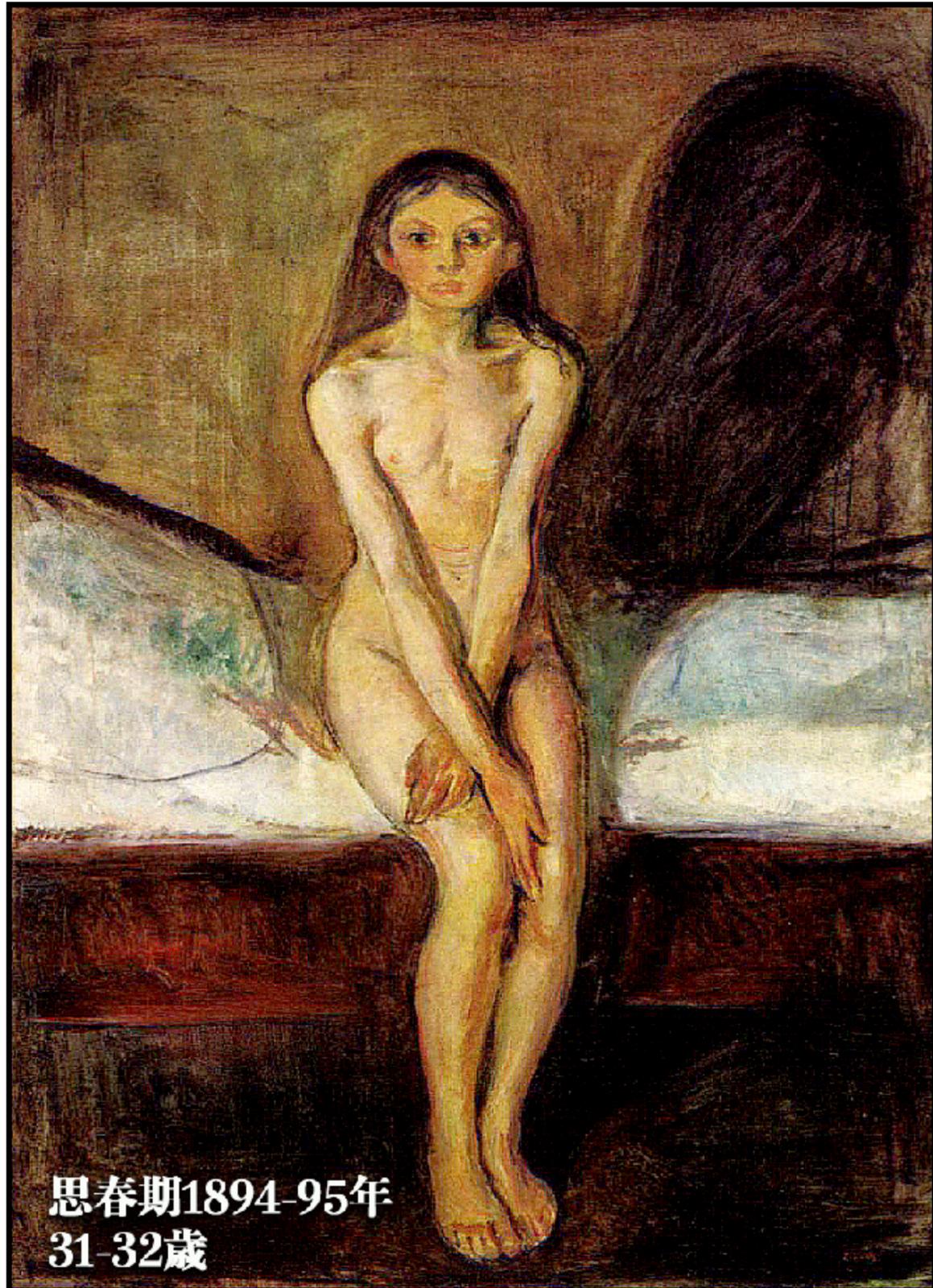


不安1894年・31歳

○漠然とした不安に覆われた時代《不安》1894年・・・左奥に急激に収致していく橋と、赤い絵の具を流したような空という舞台設定は、《叫び》や《絶望》などと共通する。一方で橋の上の人物たちは、《カール・ヨハン通りの夕暮れ》から抜け出てきたかのような。どの作品にも共通して流れているのは、時代の空気としての漠然とした不安の感情である。

③-1-1(1892・29歳~1907年・44)

不安の時代の画家



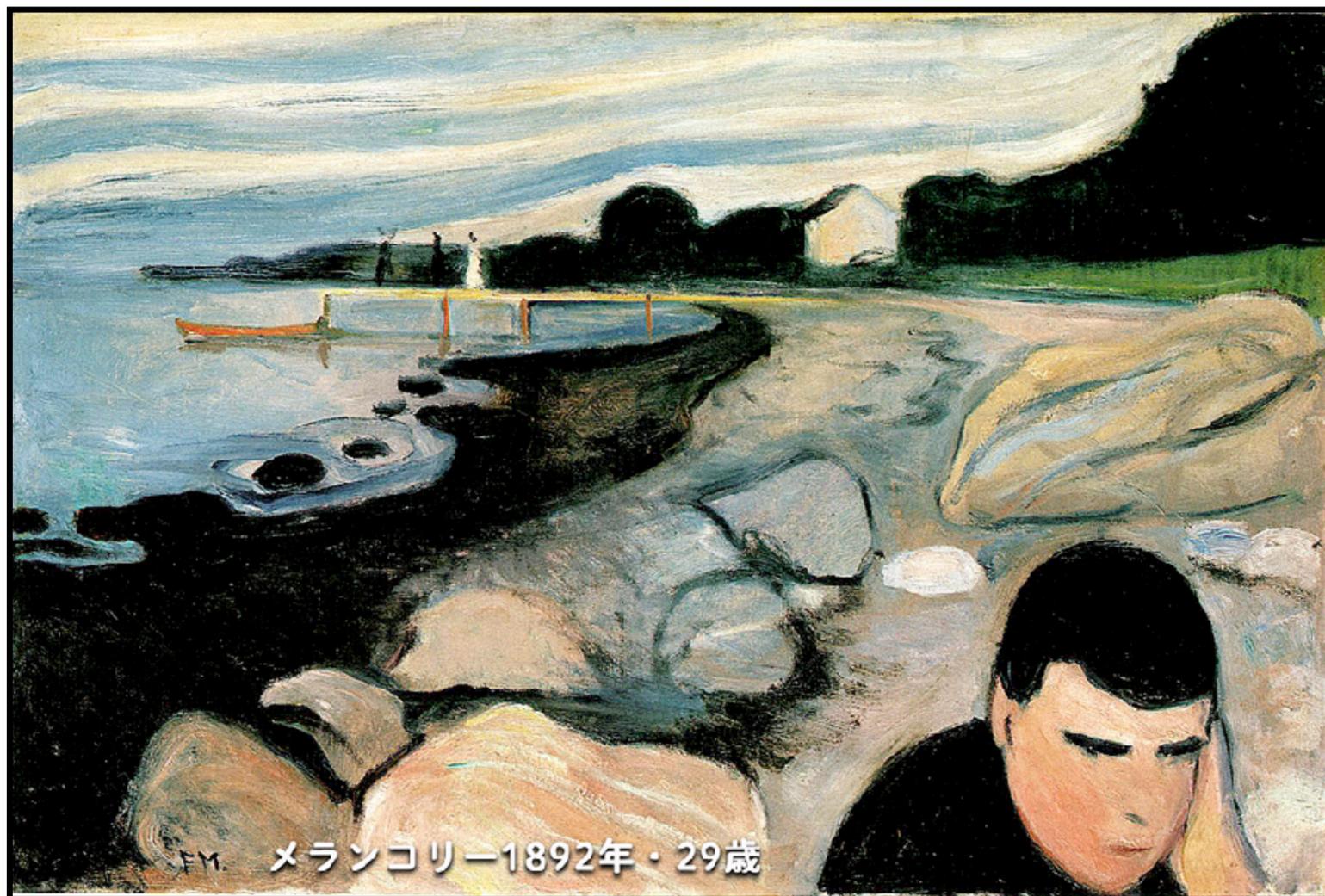
思春期1894-95年
31-32歳

○『思春期』は、ノルウェーの画家のエドヴァルド・ムンクが制作した油彩絵画作品。子供から大人への過渡期にある少女を描いている。絵のモデルは一説によると結核により15歳で世を去ったムンクの姉のソフィーエであると言われている。

○ムンクの新しい友人たちとの交流は、ムンクの性的な憂鬱を増加させる要因となった。そして、ムンクは性的な憂鬱を《思春期》に反映させている。またこの作品の制作をきっかけに、次の10年間は「思春期」と同じく、内面的な感情を象徴主義風に描く方向へ向かった。描かれている女性はムンク自身で、当時、ムンクはいとこの人妻ミリーと恋愛状態にあったが、彼女との性的な接触を恐れていたという。ムンクの性的恐怖や家庭恐怖は生涯続き、ワイン商の娘トゥラ・ラルセンからしつこく婚約を迫られても逃げまわり、結局、生涯独身として過ごした。

③-2(1892・29歳~1907年・44歳)

ムンク・スキャンダル



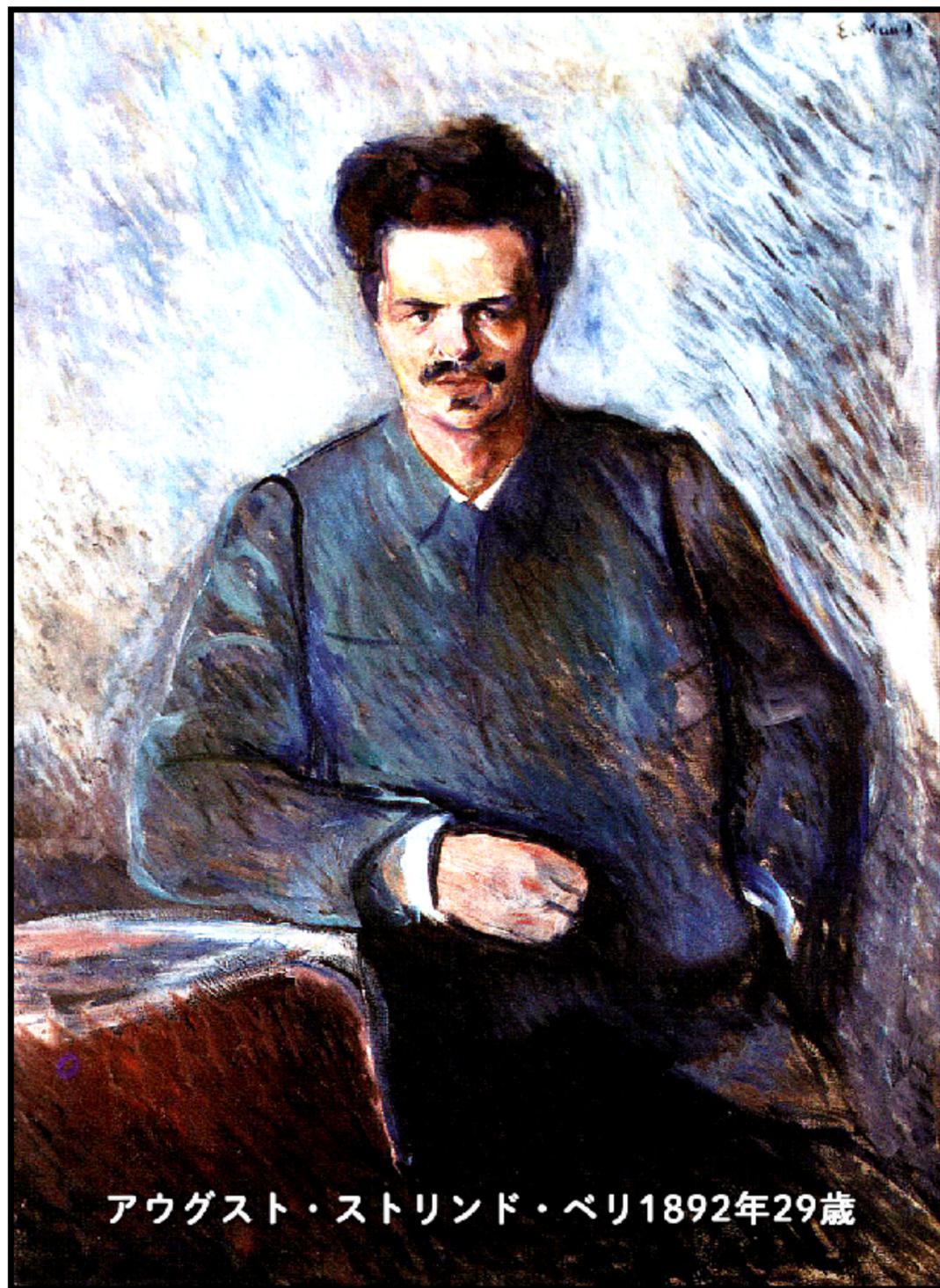
クリムト



○ 友人の妻に横恋慕した男その心に渦巻く嫉妬と憂鬱 《メランコリー》 1892年頃・・・ 画面右下の、頬杖をつくというメランコリーの伝統的なポーズをとる若い男は、ムンクの友人で21歳のヤッペ・ニールセンである。画面奥の突堤には、クリスチヤニア・ボエームの主要メンバーであるクリスチャン・クローグとその妻オーダがいる。年上のオーダに恋したニールセンの嫉妬の感情が、このメランコリーの原因である。

○ 官能のはじまる瞬間を青一色の画面に描き出す 《接吻》 1892歳・・・ この作品の元になったのは、1889年に描かれたアトで接吻する男女のスケッチと考えられている。その後、何度かムンクはこの主題を扱っているが、1892年の本は接吻する男女が右側に寄り、窓の外には前年に訪ニースの風景が描かれている。クリムトが金で彩られた名な《接吻》を描くのは、15年ほど後のことである。

③-3(1892・29歳~1907年・44歳)

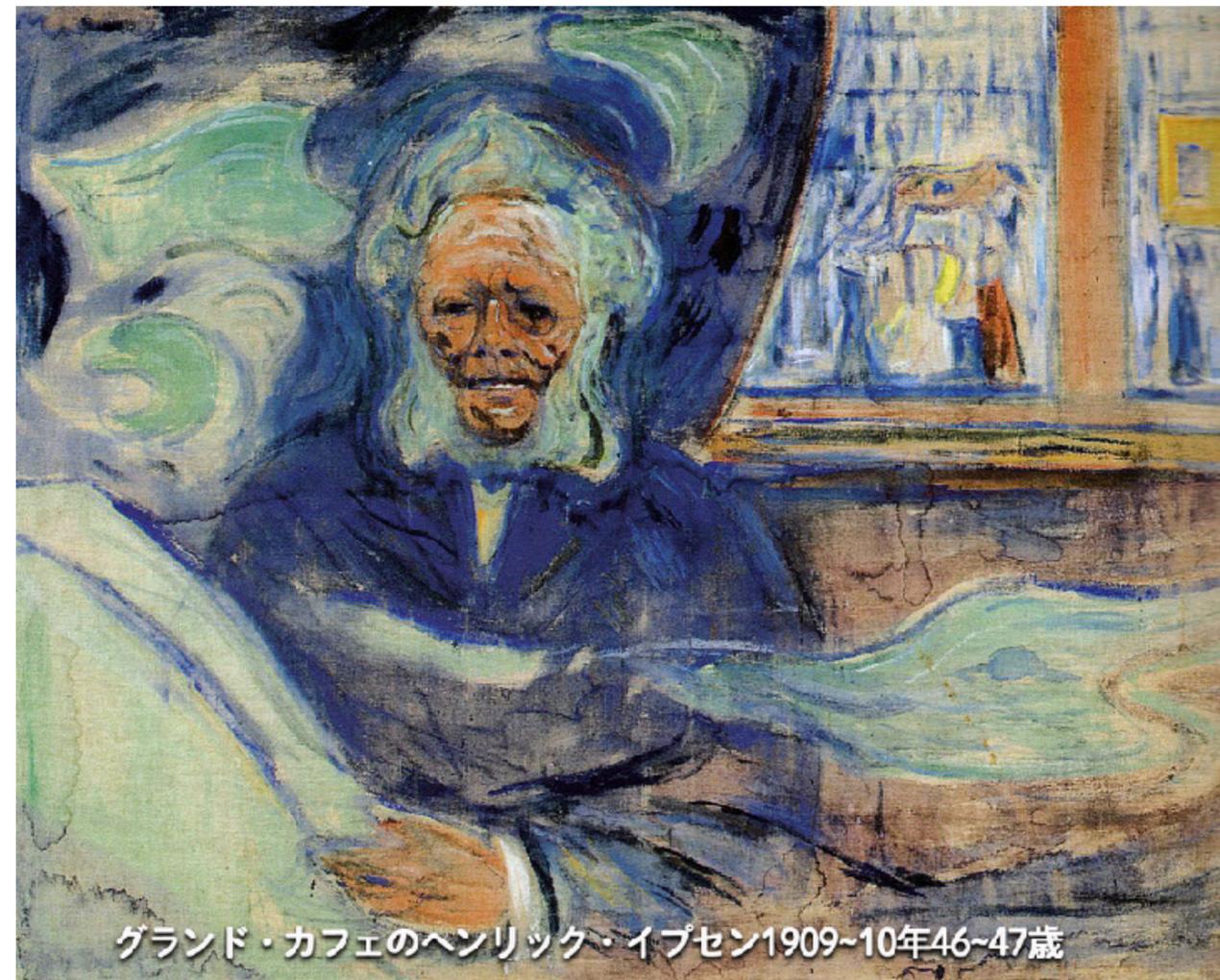


アウグスト・ストリンド・ベリ1892年29歳

○ムンクに大きな影響を与えたスウェーデンの文学者《アウグスト・ストリンド・ベリ》1892

年・・・スウェーデンの劇作家、小説家で、詩人でもあったストリンド・ベリとムンクは、性格的にはまったく異なっていたが、ベルリンで初めてあった時から意気投合し、半年ほどであったがお互いに刺激し合う創造的な関係を持った。ベルリンで描かれたこの肖像画を、後にムンクは、旧友を讃えるためにストックホルムの国立美術館に寄贈した。

文学者との交流

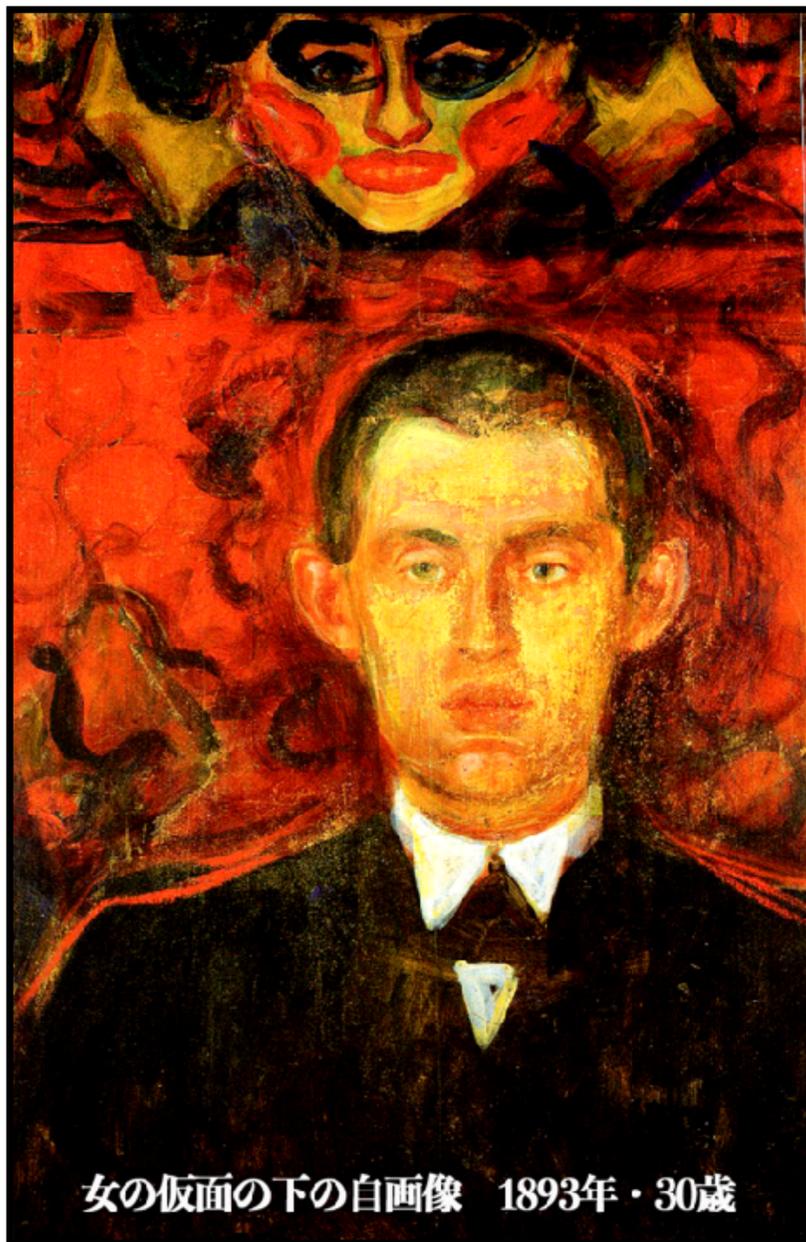


グランド・カフェのヘンリック・イブセン1909-10年46-47歳

○ムンク同様、「性と死」を描き続けた文学者イブセン《グランド・カフェのヘンリック・イブセン》1909-10年・・・19世紀後半のノルウェーを代表する劇作家で、近代演劇の父とも称されるイブセンとムンクが出会ったのは、1895年、クリスチャニアのブロムクヴィスト画廊でのムンクの個展に際してのことだった。批判の嵐にさらされ、大きなスキャンダルとなったこの展覧会を訪れたイブセンは、ムンクの商品に強い関心を抱いたという。

③-4(1892・29歳~1907年・44歳)

自画像



女の仮面の下の自画像 1893年・30歳

ファム
ファタル

○妖気を発する女性の仮面が波乱に富んだ女性関係を暗示《女の仮面の下の自画像》1893年・・・正面向きで硬い表情をしたムンクの頭上に、女の仮面が掛けられている。赤と青で隈取りをしたような毒々しい表情は、彼女が男の運命を狂わせる**ファム・ファタル**（宿命の女）であることを暗示する。仮面は象徴主義の重要なアイテムで、同時代の**ジェームズ・アンソール**や**エミール・ノルデ**らも好んで描いた。



タバコを持った自画像1895年32歳

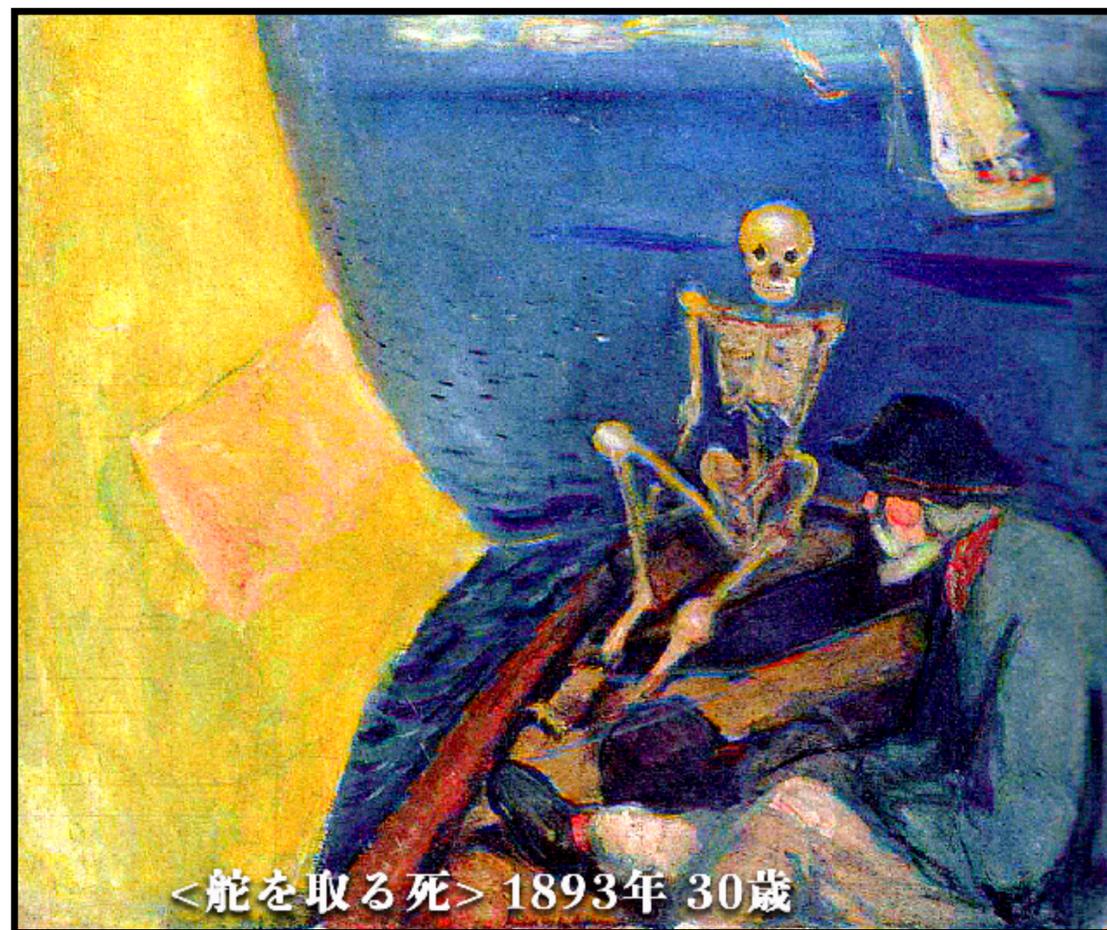
○フットライトのような光を受けて浮かび上がる思索者ムンク《煙草を持った自画像》1895年・・・フットライトによって、心臓あたりに置かれた手から胸元、顔の部分だけが照らし出され、画面のほかの部分は暗く沈んでいる。画面の中心に描かれた煙草は、ベルリンやクリスチャニアの知的ボヘミアンたちが集うカフェの文化を象徴しているようだ。ムンクが自分を思索者として描いている、という指摘にも納得がいく。

③-5(1892・29歳~1907年・44歳)

「暗い世紀末」の画家



病室での死1893年30歳



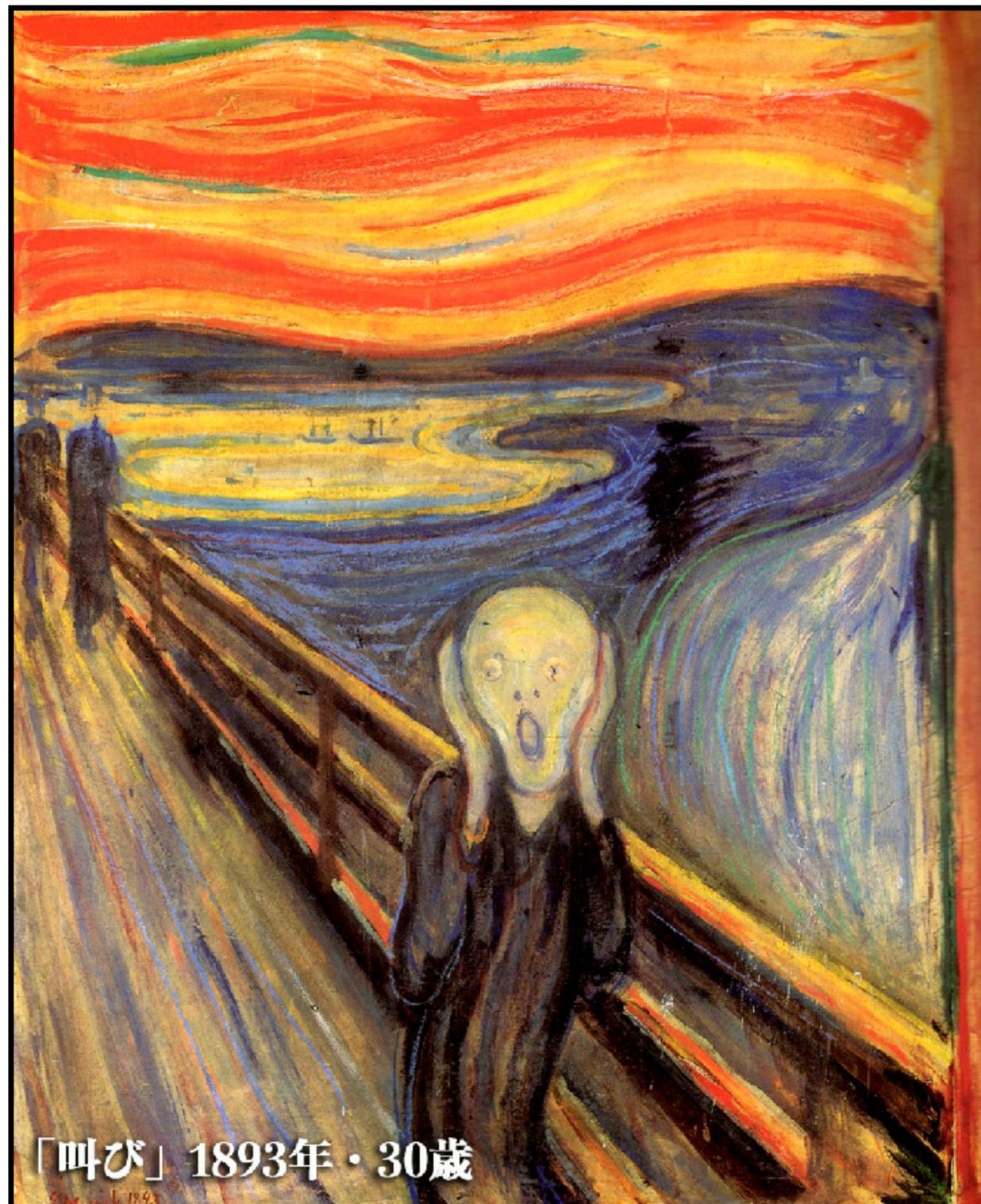
＜舵を取る死＞1893年 30歳

○ どれだけの時間が過ぎても忘れられない死の記憶 《病室での死》1893年頃・・・姉ソフィーエの臨終の場面を描いたこの絵は、かつて《死の瞬間》というタイトルで呼ばれていた。ソフィーエは一時的にベッドから出て、画面右側の椅子に座っている。ソフィーエの傍らにるのが父親、その隣に叔母、手前三人のうち横向きで立つのがムンクで、他も弟妹だがソフィーエが死んだ時は皆まだ小さな子どもだった。

○ 悠々と「死」に身を委ねる老人 《舵を取る死》1893年・・・死が前面に出た絵にもかかわらず、どこかユーモラスな雰囲気があるのは、明るい色彩で描かれていることに加え、死のパートナーが若い女性や子どもではなく、老人だからだろうか。切迫した危機感がなく、骸骨の握る舵に自分の人生を重ねて悠然としている年寄りの余裕すら感じさせる。ムンクの作品の中では異色の一点である。

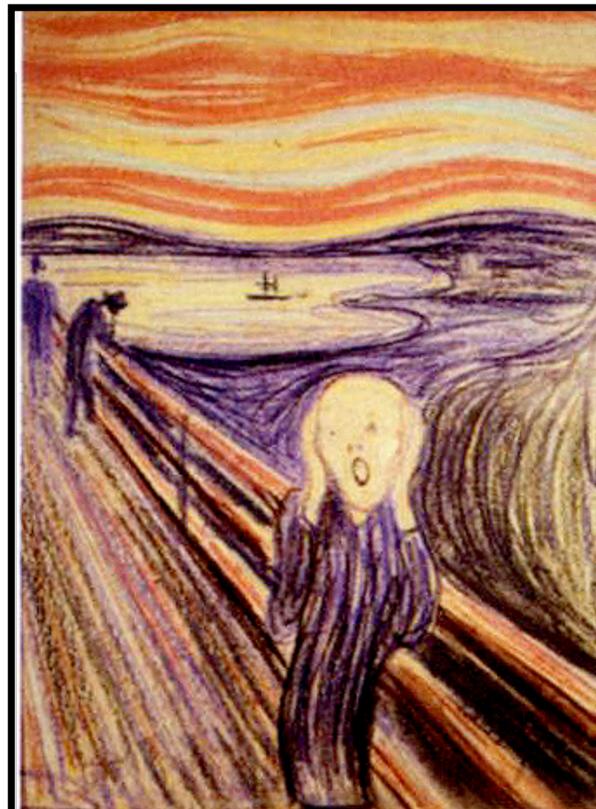
③-6(1892・29歳~1907年・44歳)

「自然の叫び」に慄いた



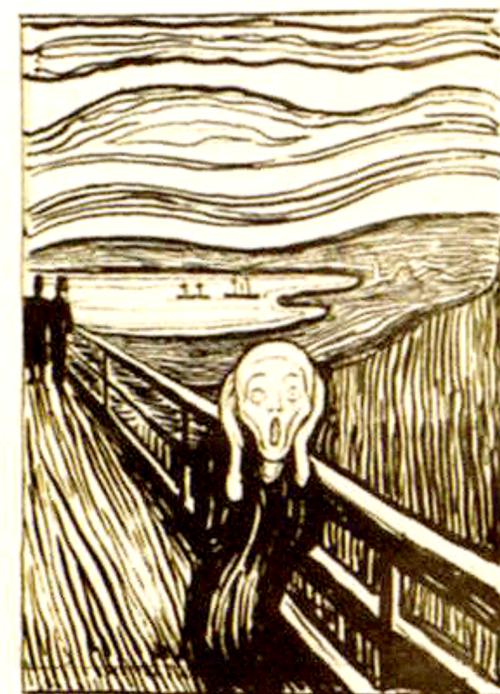
「叫び」1893年・30歳

○自然の叫びを聞いて（あるいは聞くまいと）異様に大きな両手で耳をふさぐかのようなこの男（＝ムンク自身）は、目を皿のようにして恐怖に怯えている。口は楕円形となって縦に大きく開かれ、自然の「叫び」を聞きながら、彼自身も叫んでいるかのようなのである。男の頭部に毛髪はなく、全体にやせ細った体形とともに、第二次大戦直後、ナチスの強制収容所から救い出された「生ける屍」とも言うべきユダヤ人を思い出させる。20世紀の悪夢を予言するかのような絵でもあるが、画面右前方から急進的に収束してゆく欄干の遠近感、ムンクの怯えなどはどこ吹く風で遠ざかるふたりの友人、文字通り血を流したような夕べの空と、その下に広がるフィヨルドが織りなす曲線も、この比類ない「叫び」を一層忘れがたいものとしているのである。



《叫び》

1895 パステル、厚紙
79×59cm 個人蔵



《叫び》

1895 リトグラフ 35.5×25.4cm
オスロ市立ムンク美術館

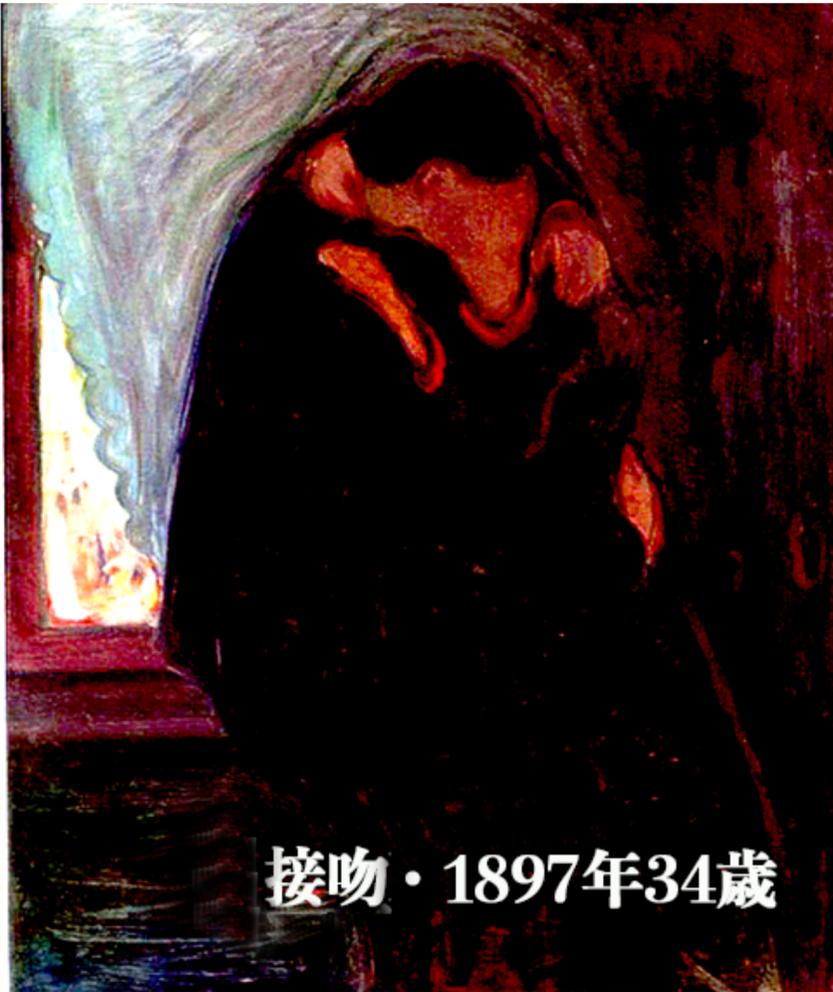
《叫び》が完成するまでにムンクは、多くの下絵や習作、デッサンなどを制作し、完成後もたびたび再制作をした。ここにあげた版画の下部には、「叫び一私は自然を貫く大いなる叫びを聞いた」と刷り込んである。

③-7(1892・29歳~1907年・44歳)

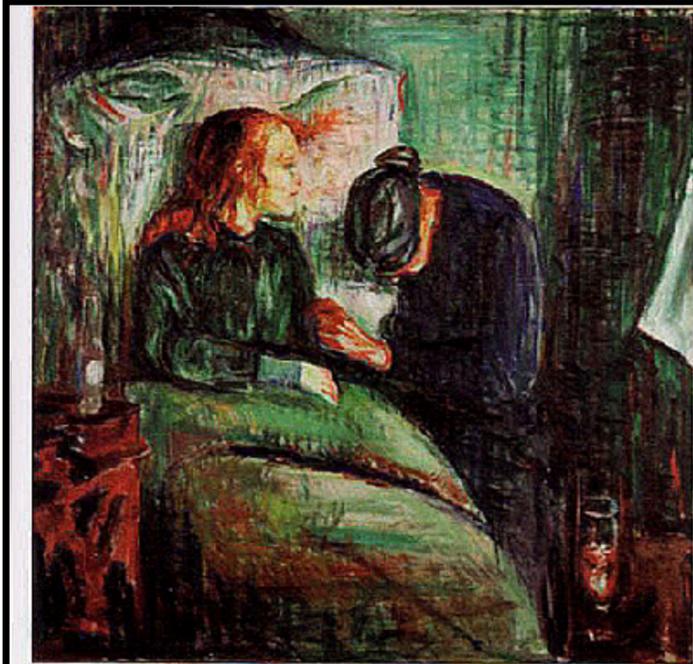
繰り返される主題



接吻IV・1902年39歳



接吻・1897年34歳



表現主義的な
筆致とコントラスト

《病める子》

1927 油彩、カンヴァス 117.5×120cm
オスロ市立ムンク美術館

最後に再制作された作品で、構図はそれまでの作品とほとんど変わらないが、全体にタッチが粗く大胆となり、明暗のコントラストもはっきりとしている。より表現主義的な傾向を強めたと言ってもいいかもしれない。



より軽快な筆遣い
より鮮やかな色彩

《病める子》

1896 油彩、カンヴァス 121.5×118.5cm
イェーテボリ美術館

第一作となる《病める子》(17頁)を発表してから10年後に再制作された作品。ムンクがパリにいた時期で、注文したのはノルウェー人のパトロン、オラフ・ショーだった。筆遣いが軽快になり、色彩もより鮮やかである。

○数ある《接吻》の中で最も抽象的な一枚《接吻IV》1902・・・接吻をモチーフにした一連の作品の中で、最も抽象化が推し進められた木版による作品。背景は木目をそのまま生かしたシンプルな状態で、抱き合う男女も手と腕を示唆するわずかな線によって、かろうじて男女であることが判別できる。

○溶け合っってひとつになる接吻《接吻》1897・・・《接吻》のヴァリエーションで、画面の形もふたりの位置も異なっているが、室内で男女が抱き合い、窓から外が少し見えるという基本構造は同じだ。男女の描写がより抽象的となり、ふたりの顔は溶け合っってひとつになっている。

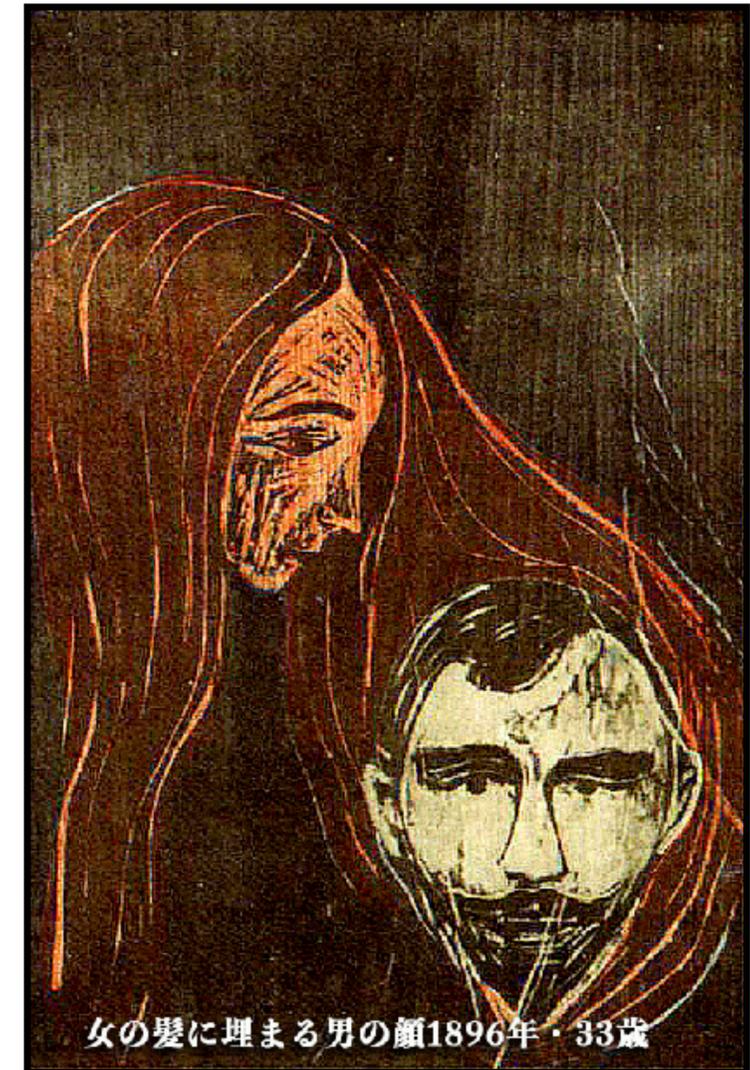
③-8(1892・29歳~1907年・44歳)

性の目覚め

生命のフリーズとは

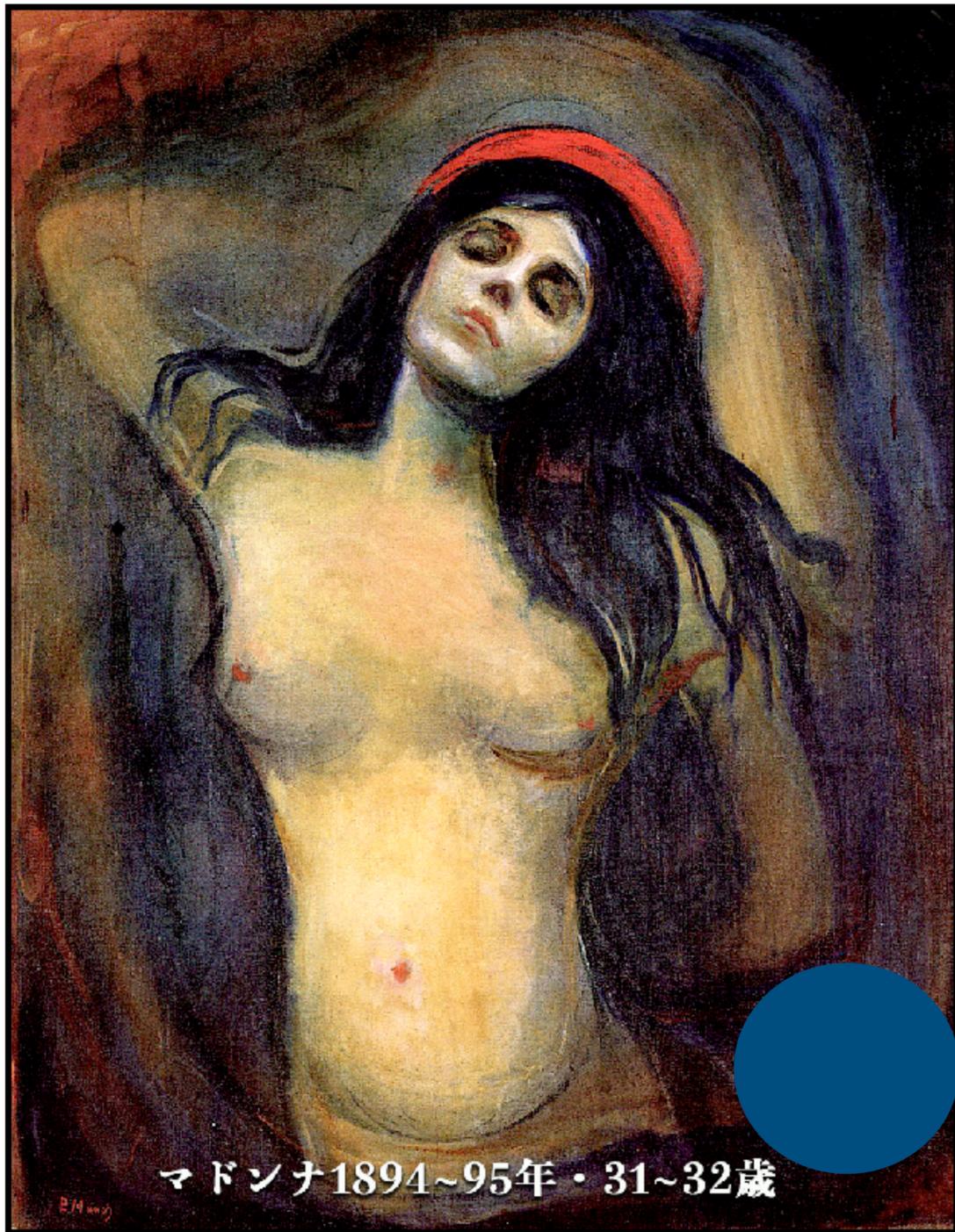


○ **男という性の戦いにおける「敗者」** 《灰》1894年頃・・・**人妻ミリー・タウロウ**との関係を背景に制作された本作の《灰》というタイトルは、不毛の愛を象徴しているが、最初につけられたタイトルは《**人類の墮落の後に**》というものだった。明るく光の当たった女性に対して、左隅に得る**男の姿**は影の中にあるかのように暗く、奔放な**人妻(ミリー・タウロウ)**に翻弄されるムンクの苦悩を見て取ることができる。



○ **豊かな長髪は宿命の女のシンボル**《**女の髪に埋まる男の顔**》1896年・・・**男の頭部**が女の髪に絡めとられている。豊かな長い髪は、男の運命を手玉にとるファム・ファタルのトレード・マークと言ってもよい。男は《**赤い鳶**》などにも描かれる作家のプシビシェフスキーと思われる。

③-9(1892・29歳~1907年・44歳)



マドンナ1894~95年・31~32歳

○ 描かれた受胎の瞬間

《マドンナ》1894-95

年・・・ムンクの代表作であると同時に、「生命のフリーズ」の中核をなす作品でもある。目を閉じて恍惚とした表情やなまめかしい姿態は明らかに性愛を暗示しており、行為の直後の様子、あるいは受胎の瞬間を描いたともされる。最初にこの絵が展示された時の額縁に、精子と胎児の絵が描かれていたという事実が、そのことを裏付けている。

愛と死にまつわる詩

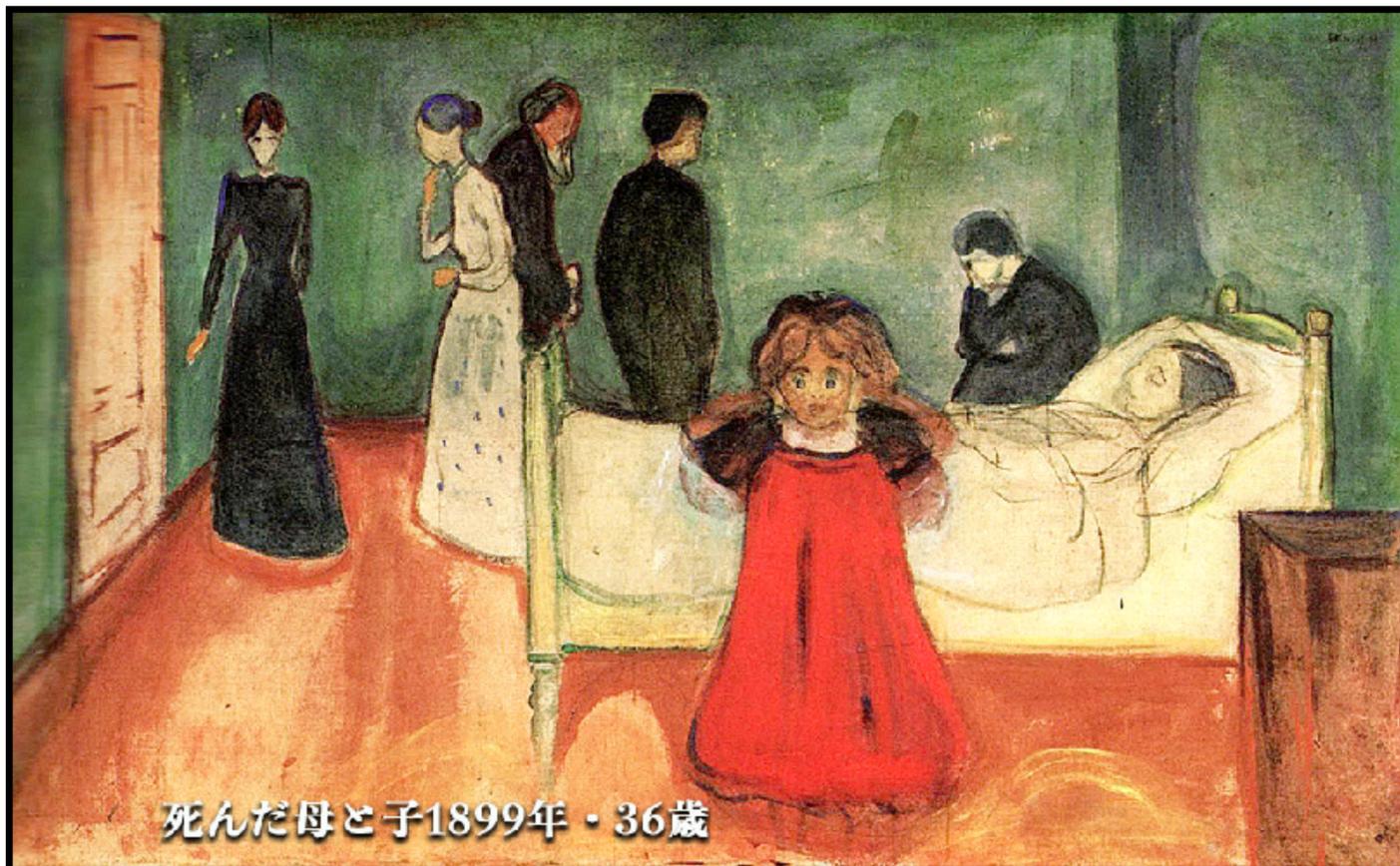


吸血鬼1893~94年・30~31歳

○ 《吸血鬼》1893-94年・・・発表時には《愛と苦悩》というタイトルを付けられていたこの作品を《吸血鬼》と呼んだのは、ポーランドの作家プシビシェフスキーであるとされる。後にムンクは、この女が吸血鬼であることを否定し、ただ接吻しているだけだとしているが、男を包み込むように広がる女の赤い髪は、彼女が**ファム・ファタル**であることを証明している。

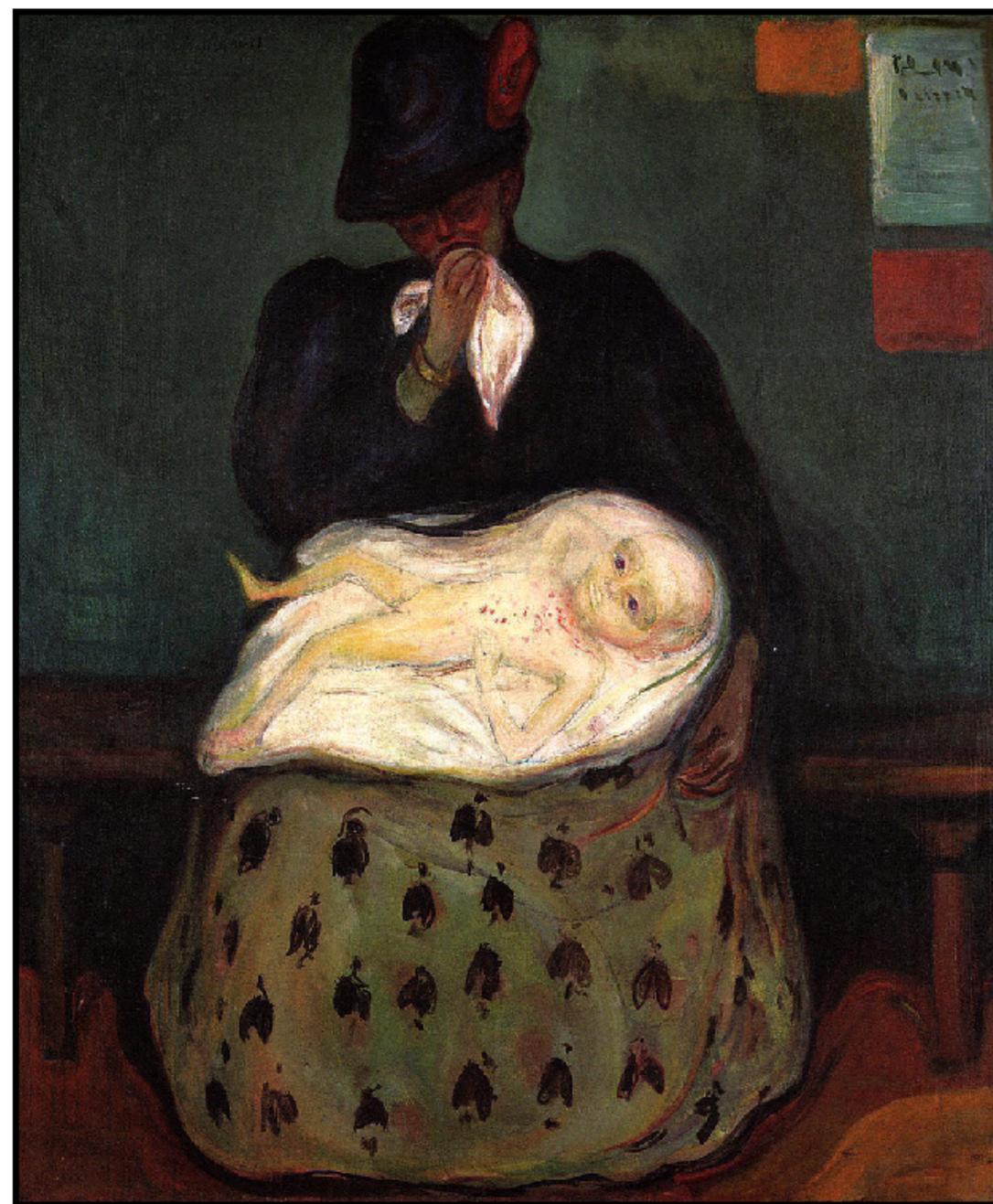
③-10(1892・29歳~1907年・44歳)

汝、自身の生活を描くべし



死んだ母と子1899年・36歳

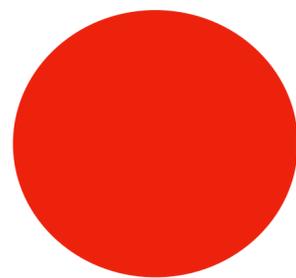
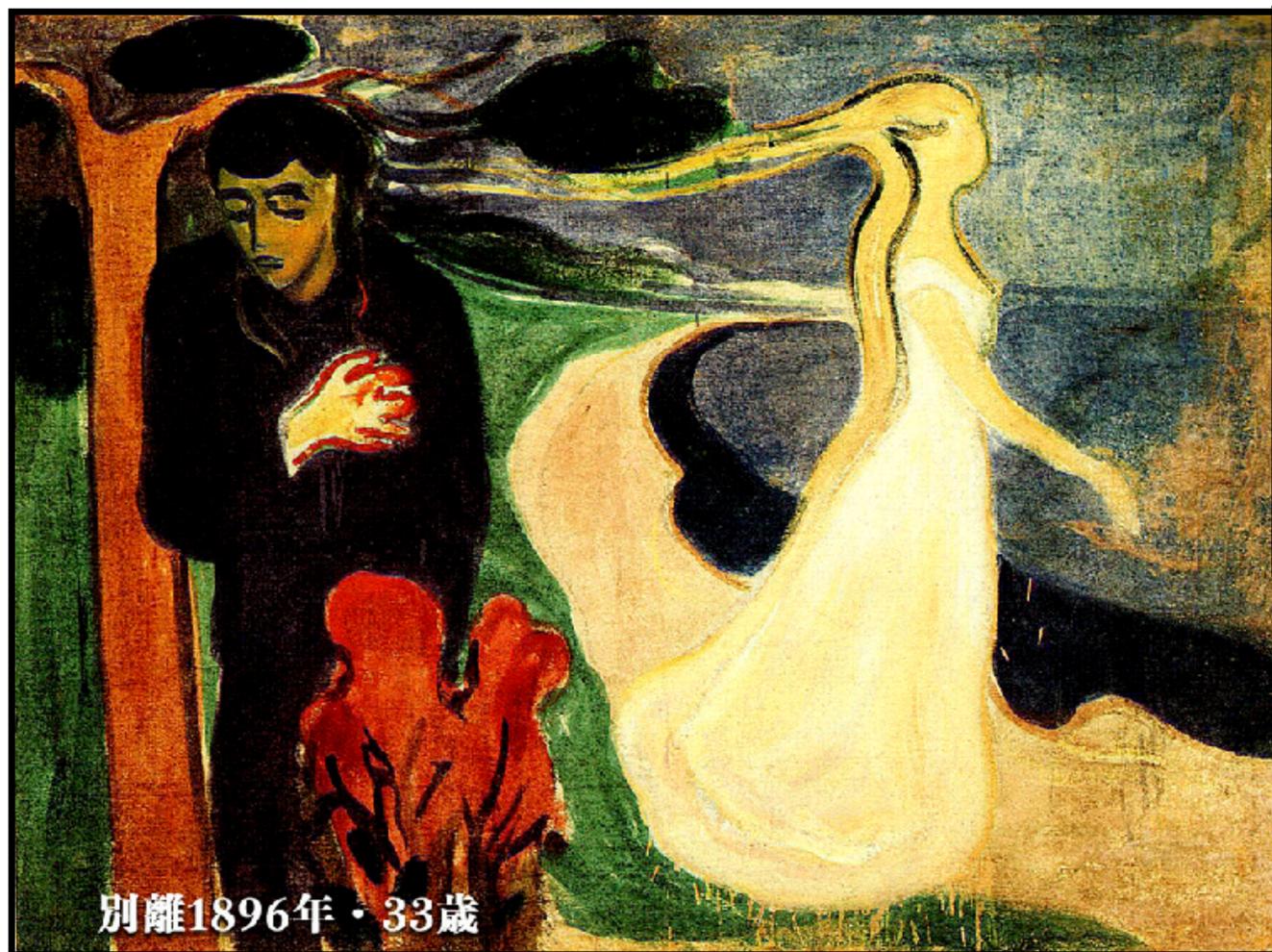
○ 母の死から30年を経て再びそめ悲劇に向き合う
《死んだ母と子》1899年・・・母親の死を描いた作品。背景には家族（左からインゲル、カレンノ父、ムンク、アンドレアス）がいるが、《病室での死》と同じく、母親が死んだ時ではなく、絵が制作された**30年後の年齢で描かれている**。《叫び》の人物と同じポーズをとる女の子が、5歳だった当時のムンク的心情を代弁しているのかもしれない。



○ 画家がパリの病院で実際に目にした母と子の姿《遺伝》1897-99年・・・聖母子のようなポーズの親子だが、子どもは瀕死の状態、母親は嗚咽をこらえている。子どもの胸には赤い斑点が浮かぶ。梅毒の遺伝が主題であることは、ムンクが本作を「**梅毒の子ども**」と呼んでいたことから明らかだ。狂気と病気、そして**死に取り憑かれた家系に生まれたムンク**にとって、遺伝とは災厄(さいやく・わざわい)をもたらすものであった。

③-11(1892・29歳~1907年・44歳)

汝、自身の生活を描くべし



○ 恋の手はどきをした人妻との別れ《別離》1896・・・

ミリー・タウロウとの別れは、ムンクの心に深い傷を残した。この作品はその体験が根底にあると考えられている。女は海の方に向かって軽やかに去って行くが、彼女の長く伸びた髪は男の首や胸にまとわりついている。男に巻きつく髪は、《吸血鬼》などにも見られるが、ムンクにとって**ファム・ファタル**を表現する際の定番であった。

○ 聖母にも魔女にもなりうる女という不可解な存在《女の三相》

1894歳・・・左端に明るい服を着た清楚な若い女性、中央に裸体の官能的な女性、その右側に暗色の服を着た無表情な女性、そして右端にはうつむき加減の男性がいる。若さ、成熟、老いという女の三相とともに、三つの異なる精神状態が象徴的に表現され、女の不可解さを強調する。**ファム・ファタル**の代名詞でもある《スフィンクス》とも呼ばれる作品。

③-12(1892・29歳~1907年・44歳)

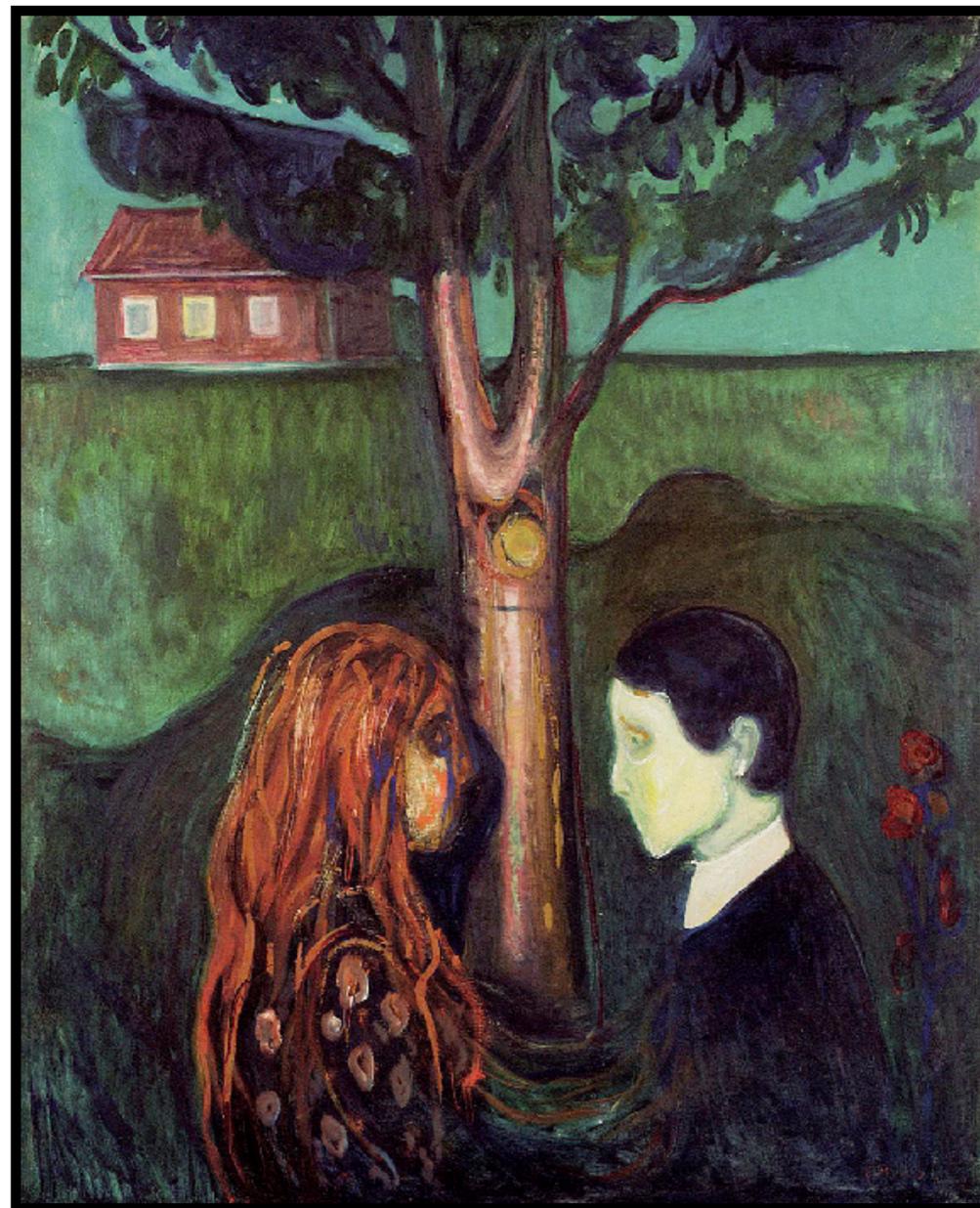
汝、自身の生活を描くべし

生命のフリーズ「私たちは向い合って立ち、あなたは私の目をのぞきこんだ。その時、あたかも目に見えない糸があなたの目から私の目に達したかのように感じ、私たちの心もひとつに結ばれたようだった」エドヴァルド・ムンク

○ムンクにとっての女性とは「マドンナ（聖母）」であると同時に「**ファム・ファタル（宿命の女、魔性の女）**」でもあったが、彼と直接かかわりをもった女性で最初に挙げられるのが、すでに触れた**ミリー・タウロウ**である。夫のカールはムンクの父と同じく軍医で、ムンクの先輩で遠縁にもあたるノルウェーの画家フリッツ・タウロウとは兄弟であった。

○赤い髪に赤い顔《見つめ合って》1899-1900年・・・

《新陳代謝》と同じく、一本の木を挟む男女はアダムとイヴを連想させるが、これは図像学的には**男性の墮落を意味**する。青白い顔に落ち窪んだ目をした男は、女の髪にまどわりつかれ、なす術もなく立ちすくんでいるかに見える。男の背後には「生命のフリーズ」の愛のテーマの連作に登場する**血の花**が描かれている。



初恋相手となった人妻
ミリー・タウロウ
Milly Thaulow (1860-1937)



③-13(1892・29歳~1907年・44歳)

汝、自身の生活を描くべし

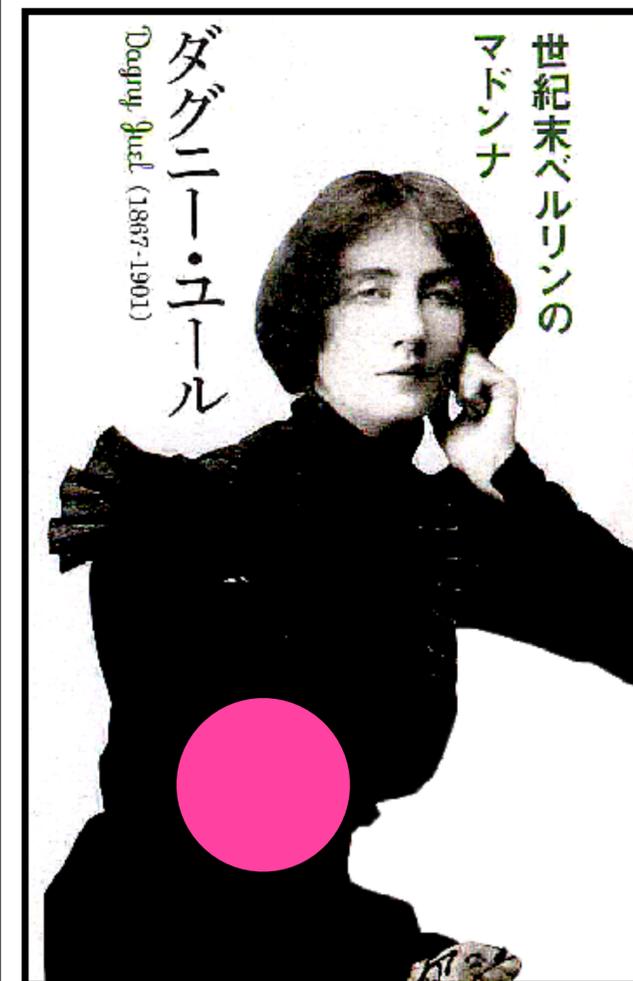


嫉妬1895年・31歳

○ 《嫉妬》1895年・・・前景の男が、背景の男女に嫉妬をしていることは容易に想像がつく。前景の男はプシビシェフスキーで、背景の男女はムンクとプシビシェフスキーの妻、ダグニー・ユールとされる。同時にこの男女は、明らかに楽園にいるアダムとイヴになぞらえられており、そのとき前景の男は神、あるいは悪魔ということになるだろう。



ダグニー・ユール



世紀末ベルリンの
マドンナ
ダグニー・ユール
Dagmar Juel (1867-1901)

○ 神秘的な美貌と知性で、多くの男性を魅了したベルリンのミューズ。作家プシビシェフスキーと結婚したが、ムンクやストリンドベリとも浮き名を流し、彼女をめぐる三角・四角関係は、《嫉妬》や《赤い蔦》といった作品に結実した。1901年、年下の恋人に銃撃されて死去。

③-14(1892・29歳~1907年・44歳)

汝、自身の生活を描くべし



ムンクを追い詰めた宿命の女
トウラ・ラルセン
Tulla Ravsen (1869-1942)

○ クリスチャニア有数のワイン商の娘。1898年に出会ったムンクとトウラは、1902年に発砲事件というかたちで決定的な破局を迎えるまで、愛憎相半ばする関係が続けた。〈生命のダンス〉や〈マラーの死〉など、「生命のフリーズ」の重要な作品が、彼女からインスピレーションを得て描かれた。ムンクに度々結婚を迫ったトウラ（写真は19世紀終わり頃）



罪・1902年39歳

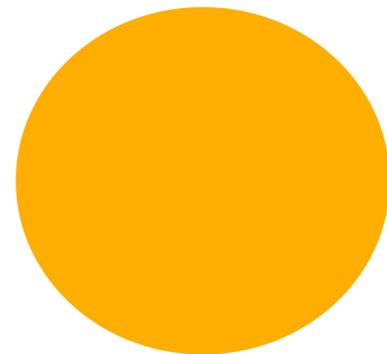
○ 《罪》1902年・・・トウラをモデルに描かれた作品。赤く長い髪を裸の体に垂らし、見開かれた鋭い眼で何かを食い入るように睨み付けている。一見したただけで、彼女がファム・ファタルであることは明らかだ。あえて縦に長い画面を選び、人物だけに集中して描いている。

③-15(1892・29歳~1907年・44歳)

汝、自身の生活を描くべし



マドンナ(ブローチ)1903年・39歳



○ 《マドンナ (ブローチ)

》1903年・・・エヴァ・ムドッチをモデルに描かれた作品である。ムンクとムドッチとはプラトニックな関係であったとも言われるが、本作の豊かな髪表現は、ムンクが彼女にファム・ファタル的な魔性を感じていたことを示している。



Eva Mudocci (1883-1953)

最も美しい
肖像画となった女性
エヴァ・ムドッチ

○ イギリス人の両親を持つヴァイオリンの名演奏家。ヨーロッパ各地で演奏旅行をしつつ暮らし、1903年、パリでムンクと出会い、恋に落ちる。東の間の恋の相手となったエヴァ。

③-16(1892・29歳~1907年・44歳)

版画への挑戦

<魅惑I>1896年・33歳



○ 黒一色の画面が男女の暗い未来を暗示する《魅惑

I》1896年・・・

水辺の風景を背景に、見つめ合う男と女。《魅惑》というタイトルにふさわしい光景のようだが、風景は荒涼としており、男と女は無表情で眼窩(目のくぼみ)が黒く落ち込んでいる。宿命の男女の救いのない行く末が暗示されているかのようだ。



<森へI>1897年・34歳

○ エロスを象徴するふたりが死を暗示する森へ《森へI》1897年・・・森へ向かって抱き合うようにして歩く男女のうしろ姿を捉えている。男は服を着ているが、女の方は裸か、あるいはほとんど透明の衣をはおっているだけだ。1915年に同じモチーフを取り上げた際には、女にも服を着せている。

③-17(1892・29歳~1907年・44歳)

生命のダンス

○ 《生命のダンス》は1899年から1900年・・・

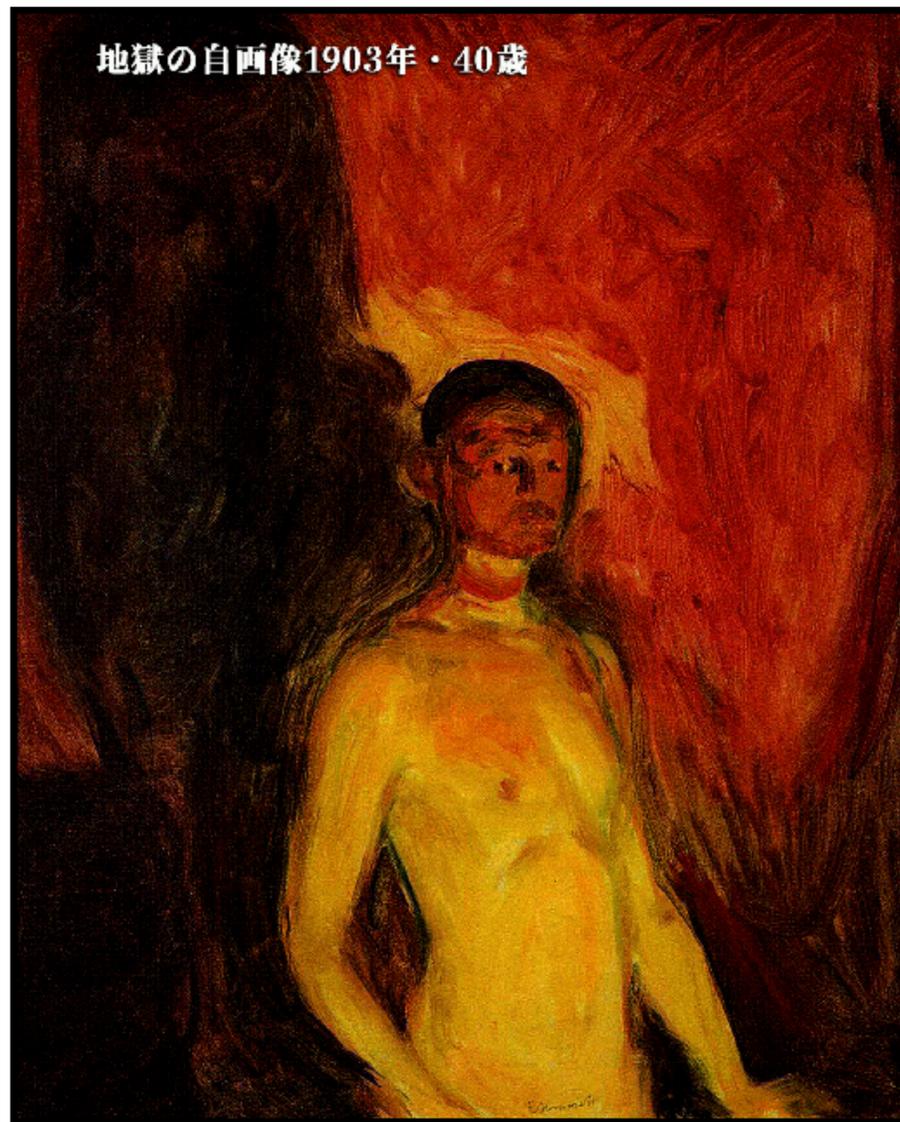
女性の髪は結ばれずに肩まで垂らされ、毛先には動きがあり、男女が一心同体で踊る様子が表現されている。合わせて、赤いドレスは男性の足元を包み込むような動きがあり、踊る男女の躍動感が感じ取れる。赤いドレスを着た女性の右側には黒いドレスの女性、左側には白いドレスの女性が描かれている。白いドレスの女性は若く、表情は明るく、喜びに満ちているように見える。一方、黒いドレスの女性は頬がやつれ、沈んだ表情である。3人の女性を通して、ムンクは女性の人生における様々な段階を表現していると解釈できる。また、白いドレスの女性は「生命のフリーズ」における**正の要素「愛」、黒いドレスの女性は負の要素、「死」「不安」**であると考えられる。



生命のダンス1899-1900年36~37歳

③-18(1892・29歳~1907年・44歳)

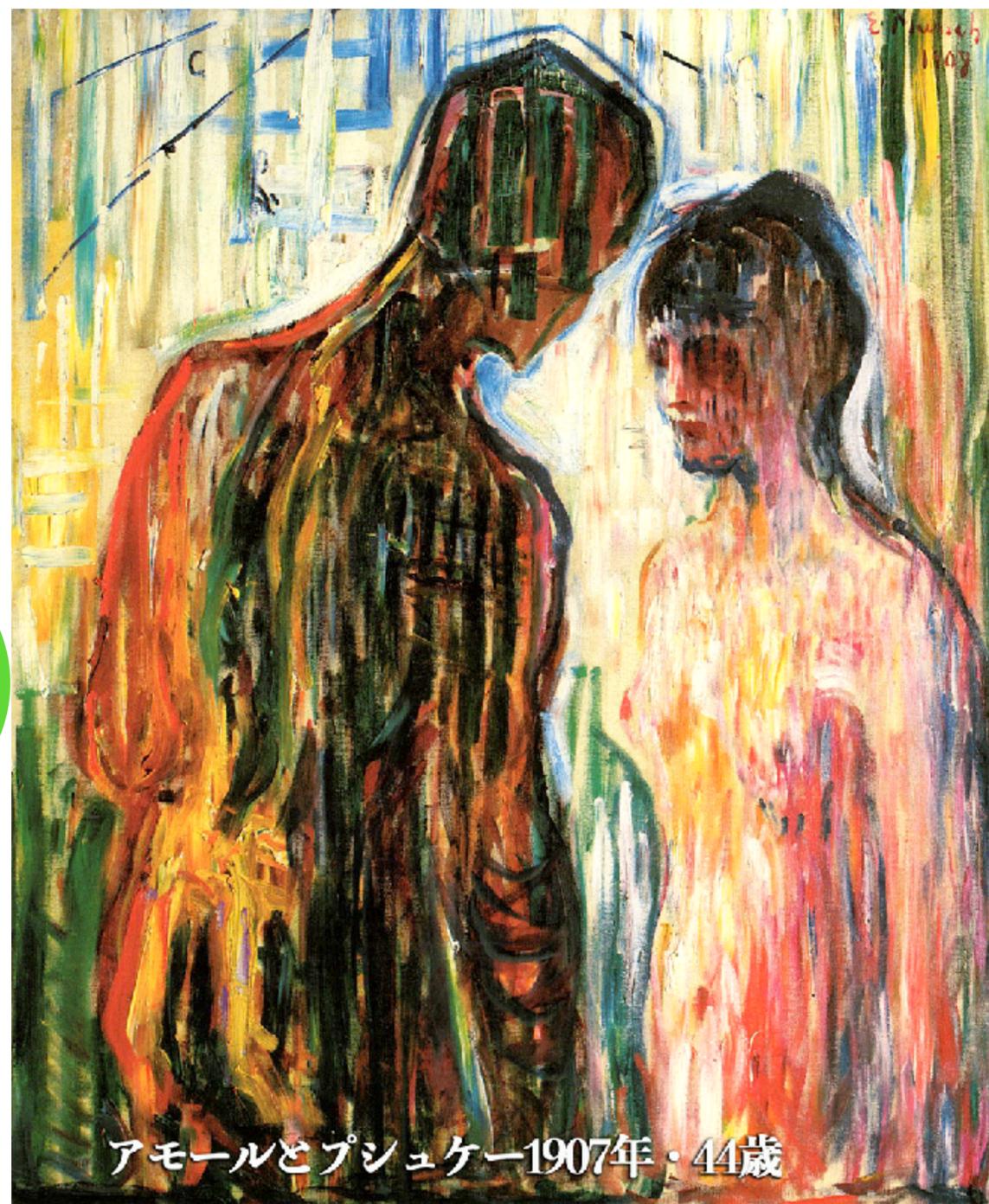
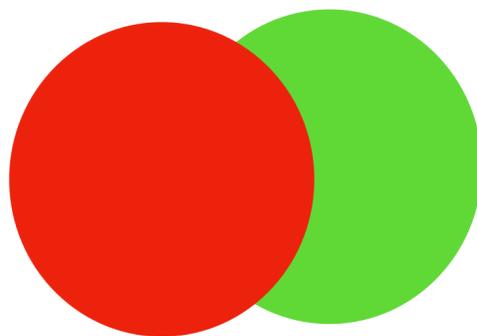
発砲事件



地獄の自画像1903年・40歳



ムンクとその恋人トゥラ・ラルセン
1899年36歳



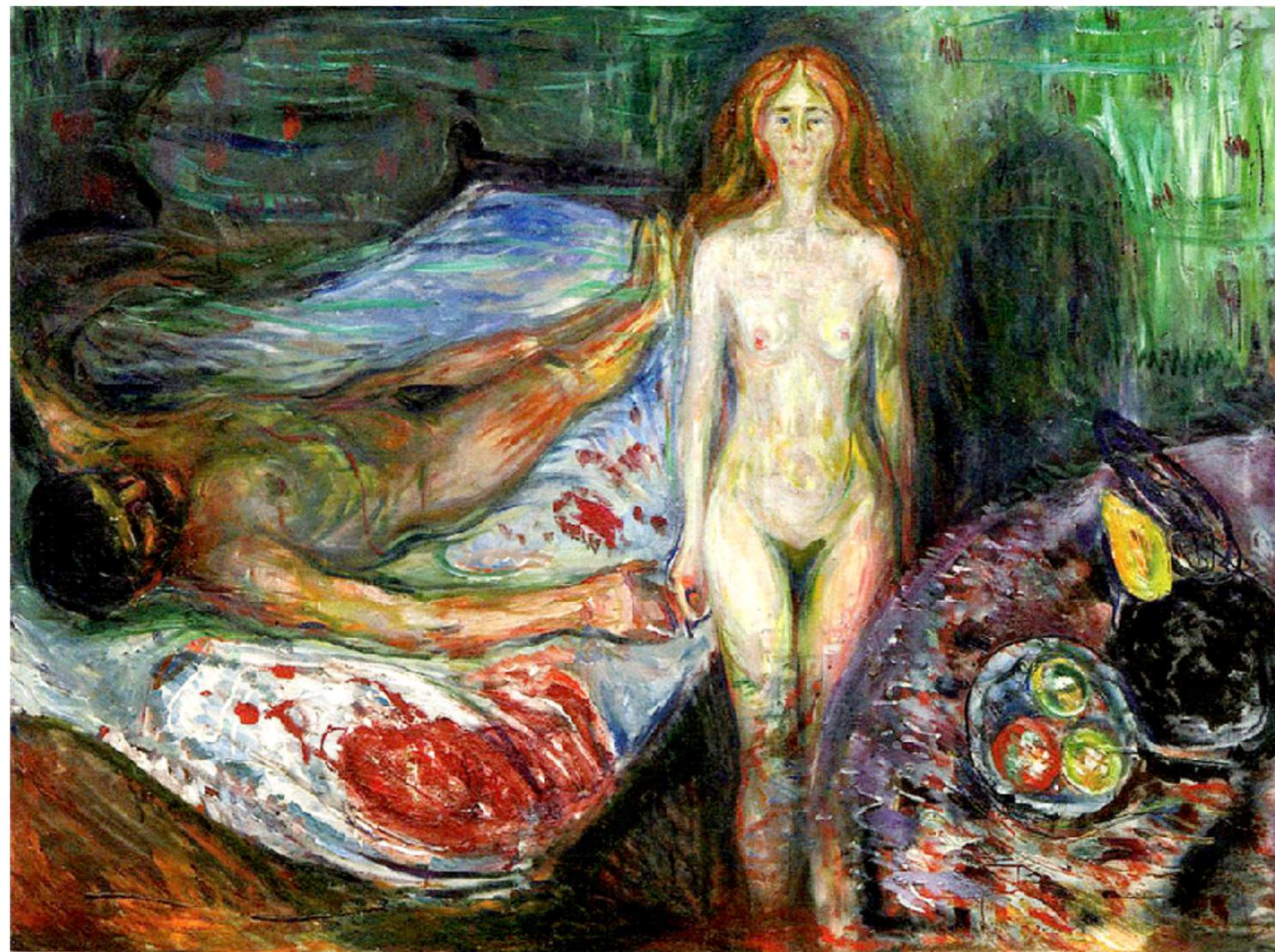
アモールとプシュケー1907年・44歳

○ 発砲事件の翌年に描かれた異色の燃える自画像《地獄の自画像》1903年・・・背景は地獄の業火(ごうか)だろうか、真っ赤に燃え盛る炎がすべてを焼き尽くしている。その前に立つ裸のムンクは、フットライトを浴び、怯える様子もなく昂然(こうぜん)とこちらを見ている。彼の背後に大きく広がる影はしかし、《思春期》と同じように、内面の不安を映し出しているかのようだ。数多くの自画像の中でも、異色の一枚である。

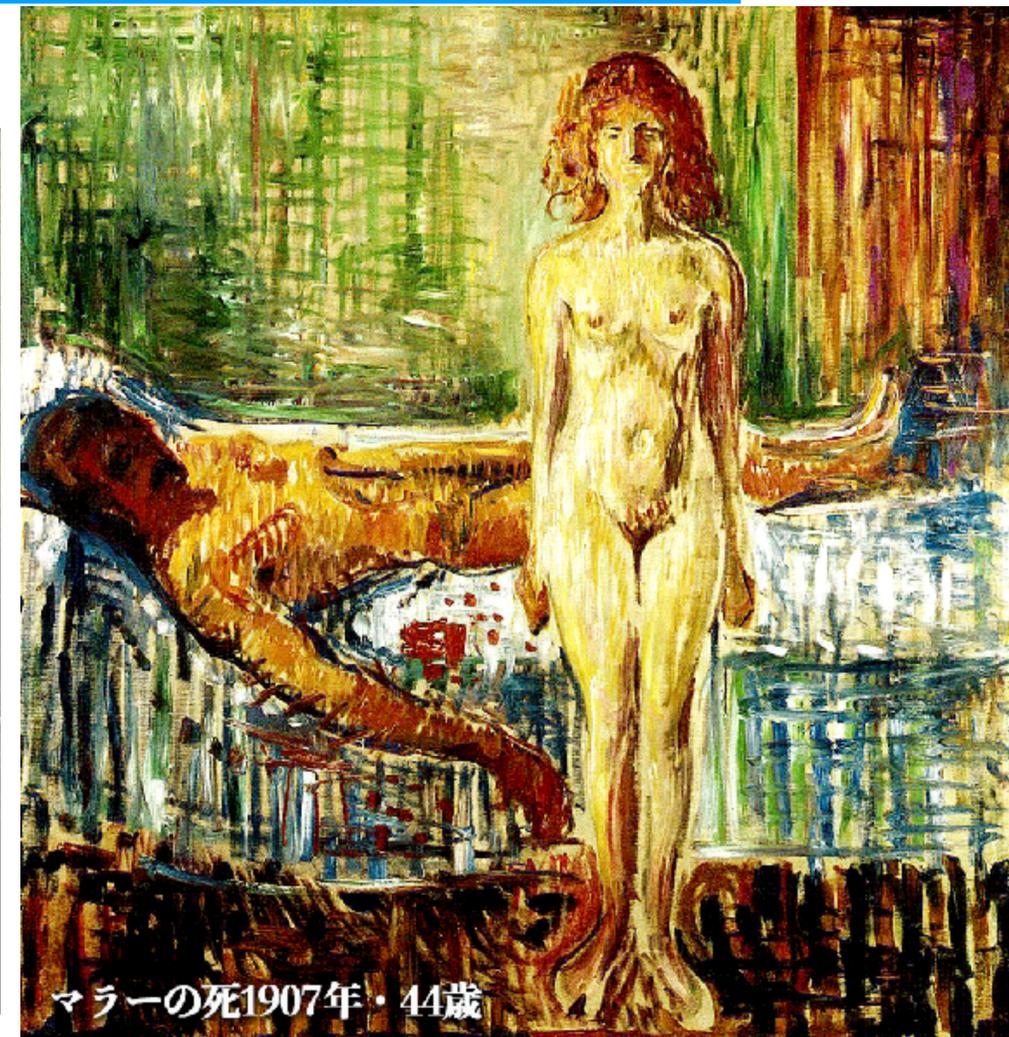
○ 《アモールとプシュケー》1907年・・・ムンクには珍しいギリシア神話に題材をとった作品。若いふたりの恋物語は、ここでは裸の男女が向き合う生々しい性愛を連想させる状況へと変換されている。表現主義的で粗削りな筆触が男女の間の葛藤を剥き出しにする。影になっている男の黒い背中と、光をあびて明るく輝く女の白い肌が強いコントラストを作り出している。

③-19(1892・29歳~1907年・44歳)

マラーの死



ジャック=ルイ・ダヴィド
《マラーの死》
1793 油彩、カンヴァス
165×128cm
ベルギー王立美術館、ブリュッセル



マラーの死1907年・44歳

『マラー1世の死』を通じて、ムンクは自らの感情を率直に表現することで、個人的な体験を超えた普遍的な真実に触れようと試みました。この作品から学ぶべきは、芸術が時代や文化を超えて人間の感情や経験を共有する強力な手段であること、そして芸術を通じて私たち自身の内面と向き合い、理解を深めるきっかけを得られることです。ムンクの『マラー1世の死』は、過去から現代へ、そして未来へと受け継がれる芸術の力と可能性を象徴する作品と言えるでしょう。

○ 〈マラーの死〉は、フランス革命において殺害された事件のこと。男は、フランスの革命家、ジャン=ポール・マラー(1743~93)で、この女性、シャルロット・コルデー(1768~93)によって、浴槽につかっているところを刺殺された。ムンクは、マラーを自分自身に、そして、コルデーを、トゥラ・ラーセンと、重ね合わせ、表現したのであると、言われています。

④-1(1908・45歳~1944年81歳)

死から生へ至る画家



ヤコブセン博士の病院での自画像1909年・46歳



ヤコブセン博士の病院にて1908-09年・45-46歳

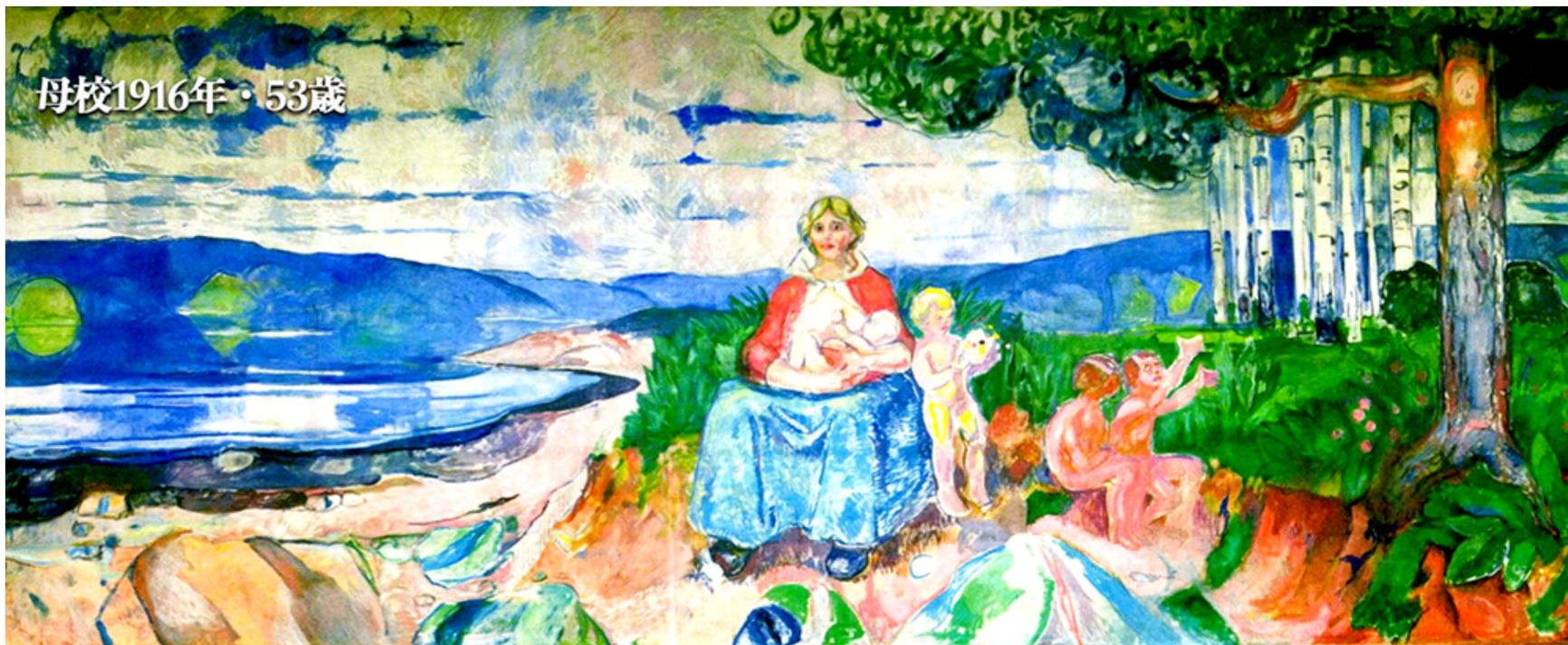
この時代のムンク	Edvard Munch
1908 (45歳)	8月、コペンハーゲンで精神を病み、ダニエル・ヤコブセン博士の診療所で治療を受ける。ノルウエー王室より聖オラフ・ロイヤルノルウエー騎士章を受章。
1909 (46歳)	ノルウエーに戻り、オスロ大学講堂の壁画のためのスケッチに励む。
1911 (48歳)	大学講堂壁画コンペに優勝する。
1916 (53歳)	クリスチャニア近郊のエケリーに家を買ひ、移り住む。
1923 (60歳)	ドイツ・アカデミーの会員になる。
1933 (70歳)	聖オラフ・ロイヤルノルウエー大十字章を受章。
1937 (74歳)	ドイツの美術館にあった82作品が「類廃芸術」として没収され、ノルウエーで競売にかけられる。
1940 (77歳)	ノルウエーがドイツ軍に占領される。ムンクは、占領軍およびそれに協力した政権との一切の接触を拒む。
1944	1月23日、エケリーの自宅で永眠。享年80。約1000点の油彩と1万5400点の版画を含む作品群と地所がオスロ市に遺贈された。

○ 《ヤコブセン博士の病院での自画像》1909年・・・入院してヤコブセン博士の治療を受け、すっかり健康を取り戻したムンクが、退院の直前に描いた自画像である。落ち着いた表情を見せるムンクは、確かに健全な状態にあるように見える。はっきりとした色彩の細長い筆触を縦横に丁寧に連ねていくことで、リズム感を生み出すとともに、安定感のある画面構築がなされている。

○ 《ヤコブセン博士の病院にて》1908-09年・・・ヤコブセン博士による治療の様子を描いたスケッチ。余白には「ヤコブセン博士は、著名な画家エドヴァルド・ムンクに通電し、その狂った脳髓を男性の積極的な力と女性の消極的な力で置き換えようとする」と記されている。

④-1(1908・45歳~1944年81歳)

オスロ大学講堂壁画



母校1916年・53歳

○知の原点としての「母校」に生命の源「母」のイメージを重ねて《母校》1916（1915-16）・・・原題の「アルマ・マーテル」は、「母校」という意味で使われるが、本来は「恵みの母」「養育の母」という意味を持つ。中央に座って赤ん坊に乳を与える母は、滋養だけでなく、知や教養をも与える存在である。初期段階では「研究者たち」というタイトルだったが、これは自然の中で好奇心を発揮する子どもたちを指していた。



歴史・1911~16・48~53歳

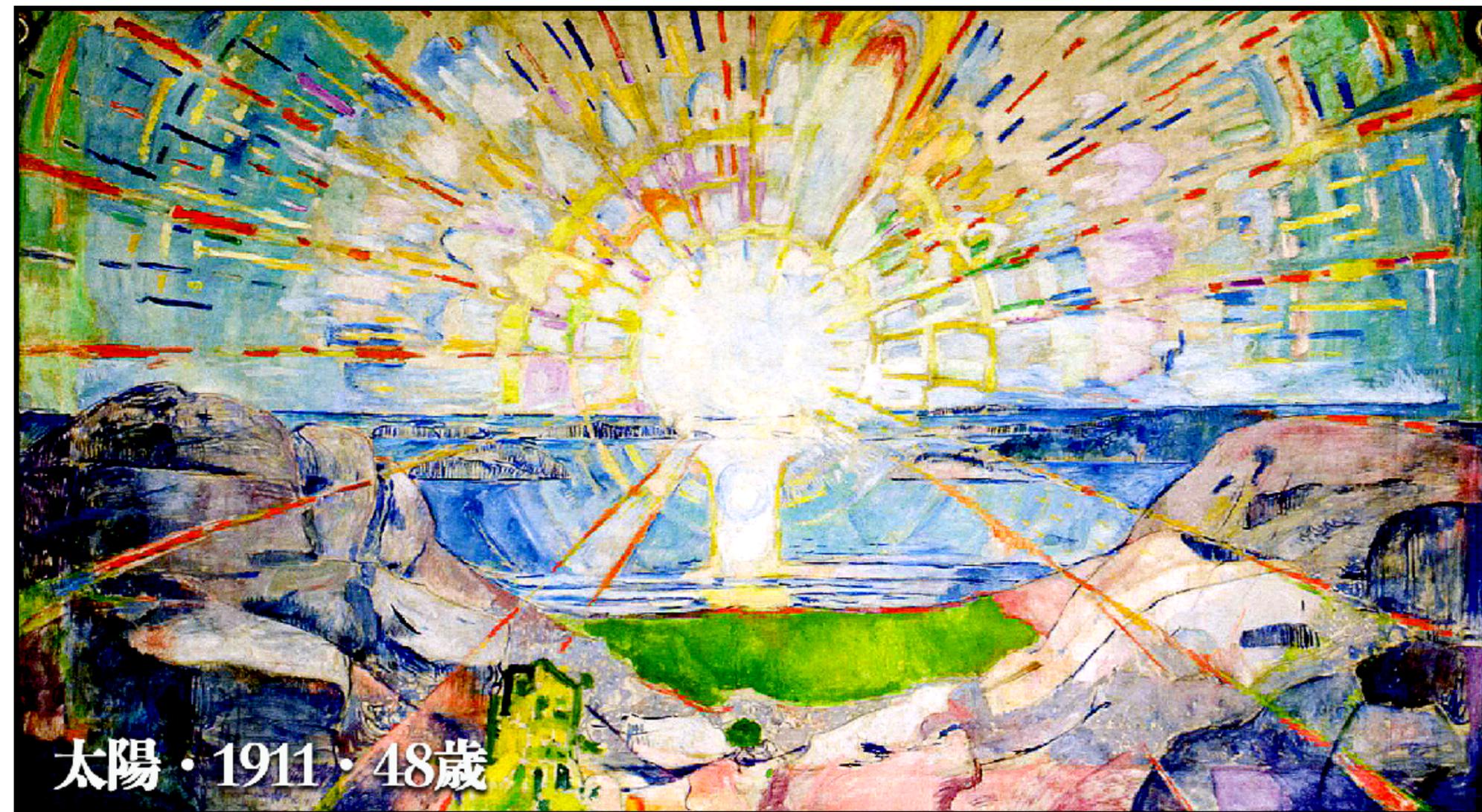
○過去から現在、未来へ知を受け継ぐ人間の営為《歴史》1911/14-16年・・・大地に深く根をはる大樹の傍らで、老人が子どもに歴史を語っている。世代から世代へと受け継がれる知の系譜を象徴する光景と言えよう。老人のモデルとなったのは、ムンクの知り合いの年老いた漁師である。ただのモデルというよりは、彼がいなければこの作品は生まれなかった、とムンクが言うほど、重要な靈感源であった。

④-1(1908・45歳~1944年81歳)



オスロ大学講堂壁画

○ 《太陽》1911年・・・完成までに7年を要した壁画の中央に位置するのが《太陽》である。水平線から昇る太陽を、何の術(てら)もなく真正面から捉えた堂々たる大作で、明るい色彩と力強い筆致による光と輝きの表現は、健康的で希望に満ちている。生命の源であり、普遍的な真理の象徴でもある太陽は、大学の講堂壁画としてふさわしい主題と言えるだろう。「太陽」は、生命の源泉としての太陽と人間と自然の調和の重要性は、今日の社会においても変わらぬ価値を持ち続けています。ムンクの「太陽」が示す、内面と外界の深いつながりと、それを通じた人類共通の感情の探求は、現代の芸術家たちにとっても重要なインスピレーションの源となり、今後も長く芸術の世界に影響を与え続けるでしょう。



太陽・1911・48歳

YOUTUBE

ムンク美術館



今日のテーマ 「病の画家ヴァルド・ムンクの生涯と作品を探る」から読み解く

- ◎今日のテーマはどうでしたか。ご感想お聞かせください。
- ◎次回のテーマのご要望を承りますので、忌憚なくお話しください。
- ◎また次回お会いできますこと、楽しみにしています。